Japanese Journal of Applied Psychology
1994, No. 19., 61-84

原　著

TTIQ — 性格検査の標準化

— 3気質類型・複合構造モデルと5性格特性次元にもとづく質問紙法性格検査の作成 —

若　林　明　雄*

THE STANDARDIZATION OF TYPE-TRAIT INTEGRATED QUESTIONNAIRE (TTIQ)

— Three temperament types-composite structure model and five common personality trait dimensions —

Akio WAKABAYASHI*

The purpose of this study was a) to investigate the structure of personality types based on Kretschmer's three temperament type theory, b) to construct a new personality typological model, and c) to standardize a personality questionnaire which was based on that new typological model. Additionally, common personality trait dimensions were investigated.

First, many studies related on personality typology and psychopathology were reviewed and examined statistically and theoretically, and new typological model was constructed. The model was constructed three basic temperament types — cyclothymic temperament type, schizothymic temperament type and collothymic temperament type. And each temperament type was constructed common dispositions and two personality types that have different features each other. We called this model "three temperament types — composite structure model". This model was conformable with traditional psychopathological studies on personality.

Second, We constructed a common trait dimensions based on VERAC-Personality Inventory and Big Five theory. The five trait dimensions were extro-introversion, emotional stability, thoughtfulness, general activity, and cautiousness. Then, we constructed a questionnaire which based on that typological model and five common trait dimensions, and standardized that. This questionnaire could classify personality (temperament) types and measure common personality traits. We named this questionnaire "Type Trait Integrated Questionnaire (TTIQ)".

序　論

パーソナリティを測定する方法にはさまざまなものがあるが，その測定法は背景となるパーソナリティ理論に密接に関係している。したがって，パーソナリティの測定について検討する場合には，その理論的背景となっているパーソナリティ理論自体を検討することが必要になる。ところで，質問紙法検査の場合，その多くは特性論ないしは類型論にもとづくパーソナリティ理論を基礎としているが，作成手続きとして現在では一般的となっている因子分析等を用いる場合，因子論にもとづく尺度構成法の方法論的限界から，検査を構成する尺度及び測定結果のもつ意味が一次元的になってしまう傾向がある。すなわち，外向性という尺度を考えた場合，得点が高ければ「外向的である」ということを意味し，それは

* 日本大学　文理学部
Department of Psychology, College of Humanities and Sciences, Nihon University

同時に「内向的ではない」ということを意味することになるのである[注1)]。これは現在の質問紙法の形式では，避けられない問題であるが，特性次元を測定する場合には特に問題にならないとしても，パーソナリティという複雑な全体像を類型という形で理解する場合には，批判を招く一因となっていたことは否めない。すなわち，Rohracher（1953）がいうように，類型というパターンは“さまざまな個体特徴が偶然に寄り集まっているのではなく，互いに内的に関係し合い，相互に規定しあっている”という性質をもつ以上，類型は，特性尺度的な一次元的性質とは異なる性質をもっていると考えられるのである。したがって，特性と同じような尺度構成法の手続きによって類型を測定することには問題があることになるであろう。この問題は，類型論の代表的なもののひとつであるKretschmer（1955）の循環気質や分裂気質という類型概念においては，特に顕著に表れる。すなわち，循環気質での“基本特徴の社交的，善良，温和，親切などの特徴が，軽躁性の極から抑うつ性の極に至るまでのあらゆる状態において見られ，循環気質の人々の明朗さや陰鬱さに，この気質特有な色合いを与えている”という記述や，分裂気質での“過敏かそうでなければ冷淡かというのではなく，分裂気質の人は過敏で同時にしかも冷淡なのである”という記述内容は，相互に一貫しない傾向が1つの類型内に含まれることを示すものであり，これを従来の一次元的尺度構成法で反映することはむずかしいものといわなければならない。

そこで，従来の尺度構成法の考え方を使用しながら，パーソナリティの多面性を理解する方法として，若林（1986b）はフラクタル概念を応用して類型と特性を統合したパーソナリティ・モデルを提案し，それにもとづく質問紙法パーソナリティ検査（VERAC-PI，以下VPIと略す）を作成している。そこでは，類型と特性を真の意味で統合したパーソナリティの記述が可能になっている。すなわち，従来よくみられたような統合理論では，類型を特性の上位概念として位置づけ，特性プロフィールのパターンによって類型が判定されるというように，類型と特性との関係が，いくつかの特性をまとめたものが1つの類型であって，それ以上の意味をもっていない“bottom-up”式のパーソナリティ理論（たとえば Eysenck, 1953など）であったのに対してVPIでは，まず類型を判定し，その上で特性プロフィールをみていくというアプローチをとっているのである。そこでは，同一の類型に分類された個人間でも異なる特性プロフィールを示す場合があるし，別の類型に分類されても類似した特性プロフィールを示す場合もあると仮定している。特に，後者のような特性プロフィール上で類似したパターンを示しながら，異なる類型に分類される場合，例えば外向性が7点とすると，従来では外向性に関しては同じ傾向をもつという意味しかもたなかったのであるが，VPIでは個人の属する類型が異なれば，特性尺度上における量的傾向は等しいが，特性傾向の現れるスタイル（表現型）という質的傾向は異なると考えるのである。したがって，ここでは類型がどちらかといえば優先的な位置づけをもっており，いわば“top-down”のパーソナリティ理論といえるものになっている。こうした特性という“部分”に類型という“全体性”が反映されている，すなわち部分に全体が含まれているようなモデルは，数学的にはMandelbrot（1977）によって“フラクタル（fractal）”として理論化されているが，パーソナリティもこうした性質をもっていると考えることができるというのである。

ところで，以上のような考え方によって作成されたVPIは，類型が重要な意味をもつパーソナリティ検査であるが，その類型は，背景となるKretschmerの理論に準じて“循環性”，“分裂性”，“粘着性”の3つであった。そして各類型を測定する尺度が一次元的であるという点で，前述の問題の解決には十分とはいえないという課題が残されていた。そこで本研究では，その後の関連研究の成果を踏まえた上で類型モデルを再構築し，この類型概念とその測定尺度をより精度の高いものとするとともに，特性尺度についても再検討を行ない，類型・特性統合モデルにもとづく新しい質問紙法検査を作成し，標準化を行うことを目的とするものである。

注1) 桑原（1980他）は，TSPSという特性用語の評定形式によって，パーソナリティの二面性を測定することを試みている。これは従来の一次元的パーソナリティ尺度とは異なり，相反するパーソナリティ傾向の共存を認めることを可能にしているが，内容的にはパーソナリティ認知における二面性を測定するものであり，パーソナリティ自体の二面性をとらえているかという点については疑問が残されている。

予備的研究：3気質類型・複合構造モデルの設定

類型概念の検討

若林（1984，他）は，これまで類型モデルとしてKretschmerの3気質類型論を基本として考えているが，これは本類型論が臨床的な妥当性と有用性をもつことに加えて，一般大学生を対象とした青木（1976），若林（1982，1986b）の研究で，まったく別の資料，方法を用いながら，因子分析によって同じように3気質類型を反映した因子構造を見いだしているということにもとづいている。ところで，若林が採用している3気質類型モデルは，集合論の考え方に基づいたもので，次のような特徴がある[注2)]。すなわち，類型の判定を，個人のパーソナリティ像と各類型の中心となる典型像との距離によって行うことにより，各類型の典型的な特徴をもつ個人群とともに，2つ以上の類型の特徴を備えた個人の存在を認め，それを“混合型”として位置づける。また，特に明瞭な特徴をもたない個人は“不定型”として分類される。これによって，類型論に対する批判の主要な論点である“中間型や移行型が無視され，ある個人を1つの類型に入れるとき類型固有の面のみが注目され他の面が見失われる（たとえば，Arnold, 1969など）”という問題に関して“混合型”という考え方で中間型や移行型をとらえることによって一つの解決案を提示したのである。

さて，この3気質類型モデルをもとに，臨床的，精神病理学的，および理論的検討を行った結果，各類型には，表面的には一見相矛盾するような特徴をもつ個人が含まれるということが明らかになった。このような傾向は，たとえば，循環性気質型においては顕著なものであり，Kretschmerのdiathetische Proportion（素因配合的二面性）以来，既に臨床的には確認されているものである。この点については，前述のVPIにおいては，そこでの“循環性”が軽躁的（高揚性の）内容をもつ項目が中心であり，うつ的（執着性の）内容をもつ項目が含まれていなかったため，循環性の類型を測定するものとして十分な内容の広がりをもっておらず，したがってこのような循環性気質という類型の全体像を測定するには至っていなかったと考えられる。この問題は，VPIの標準化に関する論文中においても，既に指摘されていたのであるが，そこでは因子論的尺度構成を重視していたために限界があった。そこで，このような傾向を考慮した上で設定されたものが“二重構造モデル”（若林，1984）であった。二重構造モデルは，3気質類型モデルをもとに，個々の類型の中にそれぞれ1つずつの下位類型を設定することで，1つの類型の中に相反する傾向が共存するという精神病理学的記述において指摘されている従来の問題点を解決することを試みたものであった。このモデルによって，従来の多くの精神病理学的パーソナリティ理論などを説明することができたものの，そこでは，まだいくつかの問題が残されていた。たとえば，循環性気質型を例にとると，二重構造モデルでは，同調性が基本傾向であり，その中で執着性が高い場合が執着性格を呈すると考えていた。したがって，循環性気質の一部が執着性格であるという包含関係が仮定されており，執着性格以外の循環性気質の人が循環性格（同調性格）と考えていた。しかし，実際問題として，関連研究におけるデータをみても，また臨床像に目を向けても，循環性気質型という類型に含まれる人には，執着性格，軽躁性格，そして両者の特徴を兼備するいわゆる循環性格というタイプが存在している。このような一つの気質類型内に複数の相互に複雑に関連したタイプの存在を仮定した類型モデルという意味では，二重構造モデルは不十分なものであった。そこでより整合性の高いモデルを構築するために，個々のパーソナリティ像について，これまでの臨床的ならびに理論的研究成果をもとに，測定項目を用意し，それぞれのパーソナリティ傾向の強さを測定したうえで，その相互関係について検討することにした。

3気質類型・複合構造モデルの構築

そこでまず，基本類型は従来の3気質類型とし，各類型を構成する要因として，それぞれ3つのパーソナリティ傾向（性格像）を設定した。この構成は，後述する精神病理学的研究およびパーソナリティ関連諸研究の成果をもとに作成したものである。個々

注2) ここでは“気質”という用語を使用しているが，これはパーソナリティの基本的類型概念を表現するためであり，特に生理的（身体的）な要素を含んでいることを意味するものではない。

の類型を構成する内容の具体的なものは，以下のとおりである。

循環性気質は，Bleuler (1911)，Bleuler & Bleuler (1960)，布施 (1960)，平沢 (1962)，保科 (1962)，Kraus (1977)，Kretschmer (1955)，森山 (1968)，更井・籠本・松永・谷口・亀田・東 (1983)，下田 (1941)，Tellenbach (1961)，若林 (1987) などの研究を参考にして，同調性 (10項目)，高揚 (軽躁) 性 (12項目)，執着性 (13項目) の3尺度を設定した。それぞれの尺度の内容は，同調性が周囲との同調，対人的積極性など，高揚性が心的テンポの速さ，快活さなど，執着性が完全主義，徹底性などであり，いずれも広い意味での循環性気質圏に含まれるものである。

次に，分裂性気質は，Arieti (1955)，Binswanger (1957)，Bleuler (1911)，Bumke (1932)，Essen-Möller (1946)，Ey (1975)，Hecker (1871)，Kahlbaum (1874)，木村 (1976)，Kraepelin (1927)，Kretschmer (1955)，町山・大橋 (1975)，Minkowski (1953)，水上 (1979)，Nannarello (1953)，Skalweit (1934)，Spaulding & Cole (1983)，内沼・斎藤 (1979)，若林 (1986a)，安永 (1977) などの研究を参考にして，分離性 (11項目)，敏感性 (11項目)，独自性 (11項目) の3尺度を設定した。それぞれの尺度の内容は，分離性が周囲からの心理的距離の保持，対人的被刺激性の高さなど，敏感性が神経質さ，対人緊張など，独自性が独断的傾向，周囲との円滑な関係の欠如などである。これらはいずれも広い意味での分裂性気質圏に含まれるものである。

最後に，粘着性気質は，Enke (1953)，Janz (1962；1968)，河合 (1972)，木村 (1974；1986)，Kretschmer (1955)，Kretschmer & Enke (1936)，Leder (1969)，Minkowska (1923)，Rabe (1966；1970)，Tellenbach (1965)，Tizard (1962)，若林 (1986d)，安永 (1980) などの研究を参考にして，直接性 (10項目)，緩慢性 (12項目)，顕示性 (13項目) の3尺度を設定した。それぞれの尺度の内容は，直接性が時間的空間的無媒介性，感受性の鈍さなど，緩慢性が堅実さ，くどさなど，顕示性が子供っぽさ，被暗示性の高さなどである。これらのうち直接性と緩慢性は，従来の粘着性気質圏に含まれるものであるが，顕示性はヒステリー性格に対応するものである。

次に，上記の項目をランダムに並べたものを印刷した用紙を配布し，3件法（あてはまる，あてはまらない，どちらともいえない）で回答を求めた。対象は大学3－4回生で，有効回答は男子861名，女子587名であった[注3)]。そこで，各尺度ごとに，各項目のキー側への回答（あてはまる）を2点，反対の回答を0点，どちらともいえないを1点として平均得点と標準偏差を求めた。そして各尺度の高得点群（平均得点よりも1SD以上の得点をとった被験者群）と低得点群（平均得点よりも1SD以下の得点をとった被験者群）をそれぞれ抽出し，基本3類型ごとに相互関係をみるとTable 1のようになった。なお，この時点では尺度により分布状態がかなり異なるため，各群の人数にはかなりばらつきがみられている。

この結果をまとめると以下のようになる。

1) 循環性気質：同調性が高い人の中には高揚性または執着性がそれぞれ高い人も低い人もいるが，同調性が低い人の中には高揚性または執着性が高い人は少ない。したがって，高揚性または執着性が高い場合には同調性が高いことが条件となっている。なお，高揚性と執着性は比較的独立している。

2) 分裂性気質：分離性が高い人の中には敏感性または独自性がそれぞれ高い人も低い人もいるが，分離性が低い人の中には敏感性または独自性が高い人は少ない。したがって，敏感性または独自性が高い場合には分離性が高いことが条件となっている。なお，敏感性と独自性はある程度独立している。

3) 粘着性気質：直接性が高い人の中には緩慢性または顕示性がそれぞれ高い人も低い人もいるが，直接性が低い人の中には緩慢性または顕示性が高い人は少ない。したがって，緩慢性または顕示性が高い場合には直接性が高いことが条件となっている。なお，緩慢性と顕示性は比較的独立している。

これらの点を考慮した上で再構成されたものが“3気質類型・複合構造モデル”である。このモデルの構造は，基本3気質類型の位置づけは，従来どおりFig. 1に示すようなものであるが，各気質類型の内部構造がFig. 2のように仮定されている。循環性

注3) ここでの被験者の大学生は，東京，神奈川，千葉，埼玉の1都3県に所在する大学に在籍する学生である。

Table 1 各気質類型別内部構造(尺度)の相互関係(出現頻度)

		高揚性 L	高揚性 H	計
同調性	H	49 (35)	71 (50)	120 (85)
	L	62 (41)	11 (7)	73 (48)
計		111 (76)	82 (57)	193 (133)

χ^2 =36.185**(24.477)**
ϕ = 0.433 (0.429)

		執着性 L	執着性 H	計
同調性	H	52 (33)	66 (48)	118 (81)
	L	68 (43)	14 (12)	82 (55)
計		120 (76)	80 (60)	200 (136)

30.733**(18.071)**
0.392 (0.370)

		執着性 L	執着性 H	計
高揚性	H	29 (22)	32 (20)	61 (42)
	L	25 (21)	36 (24)	61 (45)
計		54 (43)	68 (44)	122 (87)

0.531(0.283)
-0.066(-0.057)

		敏感性 L	敏感性 H	計
分離性	H	34 (22)	60 (43)	94 (65)
	L	63 (47)	9 (8)	72 (55)
計		97 (69)	69 (51)	166 (120)

χ^2 =44.198**(32.470)**
ϕ = 0.516 (0.520)

		独自性 L	独自性 H	計
分離性	H	44 (31)	47 (32)	91 (63)
	L	71 (55)	16 (10)	87 (65)
計		115 (86)	63 (42)	178 (128)

21.557**(18.193)**
0.348 (0.377)

		独自性 L	独自性 H	計
敏感性	H	28 (20)	23 (16)	51 (36)
	L	31 (23)	25 (17)	56 (40)
計		59 (43)	48 (33)	107 (76)

0.003(0.030)
0.005(0.020)

		顕示性 L	顕示性 H	計
直接性	H	49 (29)	67 (44)	116 (73)
	L	61 (39)	27 (17)	88 (56)
計		110 (68)	94 (61)	204 (129)

χ^2 =16.212**(11.379)**
ϕ = 0.284 (0.297)

		緩慢性 L	緩慢性 H	計
直接性	H	44 (29)	60 (37)	104 (66)
	L	55 (32)	21 (13)	76 (45)
計		99 (61)	81 (50)	180 (111)

15.985**(7.792)*
0.298 (0.268)

		緩慢性 L	緩慢性 H	計
顕示性	H	32 (21)	13 (9)	45 (30)
	L	34 (24)	29 (18)	63 (42)
計		66 (45)	42 (27)	108 (72)

3.232(1.236)
-0.173(-0.131)

**P<.01, *<.05 各尺度とも,H>$\overline{X}$ + 1SD, L<$\overline{X}$ − 1SD
各セル内の数値は、上段が男性、下段(カッコ内)が女性の人数を示す

気質型を例にとると，基本特徴として“同調性”が位置づけられる。したがって，同調性の傾向を一定以上備えていることが，循環性気質の第一条件になる。そして，その上で高揚性の傾向が強い場合には“高揚（軽躁）タイプ”，執着性の傾向が強い場合には“執着（メランコリー）タイプ”，両方の傾向が強い場合には“循環（躁鬱）タイプ”として，それぞれ位置づけられるのである（これらを下位類型と呼ぶ)。他の２つの気質類型についても同様に考えていく。したがって，分裂性気質型の下位類型は，敏感タイプ，独自タイプ，分裂タイプであり，粘着性気質型の下位類型は，緩慢タイプ，顕示タイプ，粘着タイプである。このような内部構造を各類型がもっていることを意味して，本モデルを「複合構造モデル」と名づけた。これによって，前述したような基本類型内に含まれる一見矛盾したようなパーソナリティ像の相互関係を構造的に理解することが可能になったといえよう。参考までに，ここで得られたデータをもとに尺度得点を因子分析したところ，Table 2のような因子構造が得られた。この結果は，尺度間の関係を検討した前述の結果と一致しており，モデルの妥当性を支持するものであるといえよう。もちろんその一方で，数は少ないものの，このモデルによる理論的仮説に合致しない人も存在している。こ

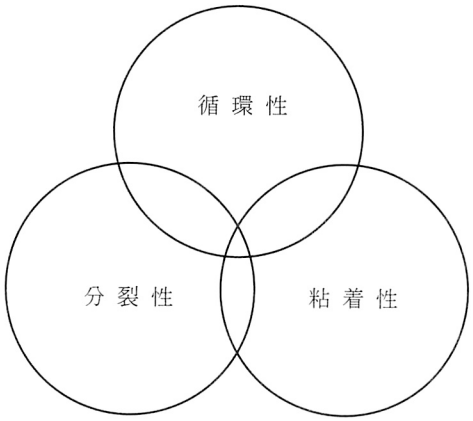

Fig. 1 3気質類型モデル

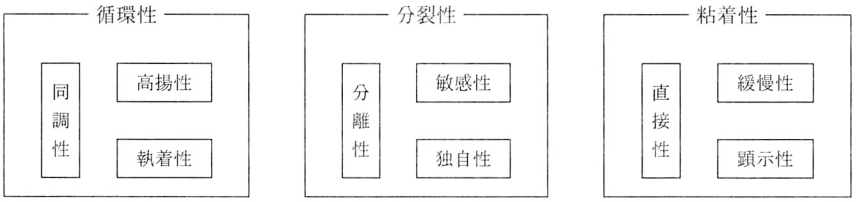

Fig. 2 各気質類型の内部構造（複合構造）モデル

れは1つには質問紙法検査の限界あるいは測定項目自体のもつ表現のあいまいさによるとも考えられるが，実際にそのようなパーソナリティ傾向をもつ人が存在している可能性も否定できない。

下位類型間の比較と基本3気質類型

次に，この時点での項目群をもとに，3気質類型・複合構造モデルの妥当性を検討するため，各下位類型に位置づけられた被験者群のパーソナリティ傾向

Table 2 内部構造各尺度の因子構造

	I	II	III	IV	V	VI
同調性	43	42				
高揚性	61					
執着性		53	24			
分離性			54	40		
敏感性			59			
独自性				48		
直接性					41	34
緩慢性		24				33
顕示性	33				38	

数値は小数点以下2桁を表示

などを他の検査や実験などによって比較検討する研究を行った。具体的には，各下位類型の被験者ごとにEPPS性格検査（Edwards著，肥田野他訳，1970）とEFT（Witkin, Oltman, Raskin, & Karp, 1971）を実施し，その結果について検討したものである（詳細は，若林，1986a, 1987, 1994）。ここで，複合構造モデルの妥当性の検討を行うためにEPPSとEFTという2つの検査を使用したのは，両検査が一般的なパーソナリティ検査とは異なる側面を測定するものだからである。すなわち，一般的に行われるように類似したパーソナリティ尺度との相関を求めることによって併存的妥当性を検討するのでは，各下位類型が従来のパーソナリティ測定尺度とどの程度類似しているかが明らかにされるだけであり，各下位類型間の関係（相違や関連性）を検討するためには十分とはいえないと考えられる。そこで，Murrayの理論に基づく顕在的欲求の強さについて測定するEPPSと，認知スタイルとしての場依存性—独立性を測定するEFTという内容的に異なる2つの検査を使用することによって，下位類型尺度を構成する内容（パーソナリティ傾向）には含まれない側面（欲求と認知スタイル）から下位類型間の関係について検討を行うことで，各下位類型の内容的妥当性の検討を試みたものである。なおEFTは，24枚の図版から構成されているもので，各図版ごとに回答までの反応時間を測定し，全図版への回答終了後，誤答数をチェックしている。

被験者は，EPPSでは，各タイプごとに男女それぞれ80名（計480名），EFTでは，各タイプごとに男女それぞれ20名（計120名）である。なお，ここでのタイプ間の比較は，各気質類型とも対照的な2つの下位類型（例えば循環性気質型では“高揚タイプ”

と“執着タイプ”）について行い，両方の要素をもつ下位類型（同じく“循環タイプ”）は取り上げていない。

その結果をまとめると以下のとおりであった。

①循環性気質型：EPPSで測定された尺度の中で，下位類型同士を比較した結果，高揚タイプの被験者は“顕示”と“変化”の得点が，執着タイプの被験者は“達成”，“秩序”，“他者”，“内罰”，“持久”の得点が他のタイプよりも有意に高くなっていた。これらの傾向は，循環性気質型という類型に含まれるパーソナリティ像に従来精神病理学的，臨床的に認められていたものと一致している。一方，EFTでは，両タイプ間に反応時間，誤答数とも差は認められなかった。

②分裂性気質型：EPPSで下位類型同士を比較した結果，敏感タイプの被験者は，“秩序”，“救護”，“内罰”の得点が，独自タイプの被験者は，“達成”，“自律”，“支配”，“攻撃”の得点が他のタイプよりも有意に高くなっていた。これらの傾向は，分裂性気質型という類型に含まれるパーソナリティ像に従来精神病理学的，臨床的に認められていたものと一致している。一方，EFTでは，両タイプ間に反応時間，誤答数とも差は認められなかった。

③粘着性気質型：EPPSで下位類型同士を比較した結果，緩慢タイプの被験者は，“秩序”，“持久”の得点が，顕示タイプの被験者は，“顕示”，“救護”，“変化”，“攻撃”の得点が，他のタイプより有意に高くなっていた。一方，EFTでは，両タイプ間に反応時間，誤答数とも差は認められなかった。

以上の結果をみる限り，3気質類型・複合構造モデルを構成する9尺度によって測定しているパーソナリティ分類は，経験的に妥当性があり，弁別力があるといえよう。そして下位類型を設定することによって，従来の類型論のように少ない類型で大まかな位置づけをすることから，パーソナリティ類型を細分化して判定することが可能になった。そしてこのパーソナリティ類型は従来の精神病理学的研究の成果とも整合性をもっているのである。

ところで，この結果は，下位類型が独立したパーソナリティ類型であるということを意味するのであろうか。もしそうであるならば，基本3気質類型を設定する必要はなくなってしまい，個々の下位類型を並列的に設定すればよいことになる。この点については，同じ気質類型に含まれる下位類型同士の比較だけでなく，基本3類型間の比較も行う必要がある。そこで基本3気質類型間の比較を行ったところ，各気質類型間の相違の方が同一の気質類型に含まれる下位類型間の相違に比べてより大きいことがわかった。これはEFTの結果をみるとさらに明瞭になる。EFTでは，どの気質類型でも，反応時間，誤答数とも下位類型間では有意差が認められなかったが，これを気質類型別に比較すると次のような相違が認められている。すなわち，反応時間では，“循環性”＜“分裂性”＜“粘着性”，誤答数では，“循環性”＞“分裂性”＝“粘着性”という傾向がある（以上P.＜01）。こうした反応時間は，質問紙法検査に対する回答（自己のパーソナリティ認知）よりも本質的な個人差を反映するとも考えられ，基本3気質類型における相違の方が，より基本的なパーソナリティを示していると解釈できるのである。以上のことから，下位類型間のEPPS尺度上の相違は，あくまでも両者を比較するうえで表れてくるものであり，そのタイプの特徴を必ずしも反映しているとは限らず，共通の気質類型に属する下位類型は，表現型が異なっているものの，気質レベルの基本的な属性では共通性をもっていると考えられる。

研究Ⅰ：3気質類型・複合構造モデルにもとづくパーソナリティ類型測定尺度の再構成と標準化

目　的

これまで述べてきた諸研究において使用されていた項目群をもとに，それを再検討し，新しい質問紙法検査として再構成するとともに，標準化を行う。なお，本検査の適用対象は，現時点では，本研究の標準化データを構成する大学生程度（18歳から23歳程度）とする。

方　法

具体的な尺度構成の手順は以下のとおりである。

①前述した3気質類型・複合構造モデルを検討する際に使用した項目群をもとに，関連研究の成果を参考にして，各尺度（パーソナリティ像）の測定内容を構成するのに必要と思われる質問項目を加えた。

②既に用意されていた103項目と，①で付加された27項目の計130項目と虚偽尺度を構成する10項目を同一の用紙に印刷し，この質問紙を大学3，4回生に実施し回答を求めた。回答用紙には，データ処理の

効率化を考慮し，マークシートを使用した。なお，回答を求めるための教示は，次のようなものである。「以下に人間の性格や行動に関する文が項目として並んでいます。各項目を読んで，その内容が自分にあてはまるかどうかを考え，あてはまる場合には「はい」，あてはまらない場合には「いいえ」にマークしてください。なお，回答は，なるべく「はい」か「いいえ」のどちらかを選ぶようにしてください。しかし，どうしても判断がつかない場合には「どちらともいえない」の欄にマークしてください」

調査対象となった大学生の所属する大学の所在地は，北海道，宮城，埼玉，千葉，東京，神奈川，愛知，石川，京都，大阪，兵庫，広島，福岡の各都道府県と日本全国に分布している。そして回収されたデータのうち，回答に不備があったもの，虚偽尺度によって回答の信頼性に疑問があるものを除くとともに，大学所在地の地理的条件などを考慮した結果，最終的な分析に使用されたデータ数は，男子4,316名，女子2,396名である。なお，回答は，前記と同じ３件法で求めている。

③ このデータをもとに，類型モデルを構成する９尺度の得点と各項目の回答との点双列相関係数を算出した。ここで３件法で回答を求めながら点双列相関係数を求めたのは，以下の理由によるものである。すなわち，回答は３件法であるので，尺度得点を算出するための基礎となる項目得点は，質問項目に対して肯定的反応（「あてはまる」という回答）の場合に２点，否定的反応（「あてはまらない」という回答）の場合に０点としており，肯定的でも否定的でもない反応（「どちらともいえない」という回答）の場合には，その中間として１点を与えることにしている（もちろん逆転項目の場合には得点の方向が逆になる）。しかし，検査での回答（反応）は，基本的には各質問項目に対して「あてはまる」か「あてはまらない」かであり，「どちらともいえない」という回答は，例外的なもの（男性 $\overline{X}=1.9\%$，$SD=0.84$，女性 $\overline{X}=2.4\%$，$SD=1.13$）であるため，各項目の反応分布は，２点と０点にピークをもつ双峰性の分布となっている。したがって，これを相関を求めるために連続量として処理することは適切とはいえないと考え，「どちらともいえない」という回答については，各項目ごとに「あてはまる」という肯定的反応と「あてはまらない」という否定的反応の割合に準じて両者に分配し，実質的には２件法として処理することにしたためである。なお，このような方法は，質問紙法検査における項目分析においてしばしば使用されている。

④各尺度別に点双列相関係数が0.7以上の項目をピックアップし，それぞれの尺度を構成する項目を決定した上で，各尺度別に項目間相関を算出した。そしてVPIの作成時と同様に，項目間相関が極めて高い項目対がある場合には，その内容を検討したうえで，必要に応じて取捨選択を行った。すなわち，項目内容がほぼ等しく，かつ項目間相関が高い項目対については，いずれか一方の項目を削除した。

⑤以上の手続きによって残された各項目についてG－P分析を行い，その結果をもとに，弁別力の高いものを優先し各尺度の項目数をある程度そろえた。なお，最終的に選択された項目のG－P分析での χ^2 値は，すべて0.1%水準で有意のものである。

以上の手続きをふまえて，今回標準化のために使用された項目は，以下のとおりである。循環性気質型・共通項目（同調性測定項目）：12項目，循環性気質・高揚性測定項目：８項目，循環性気質・執着性測定項目：８項目，分裂性気質型・共通項目（分離性測定項目）：12項目，分裂性気質・敏感性測定項目：８項目，分裂性気質・独自性測定項目：８項目，粘着性気質型・共通項目（直接性測定項目）：10項目，粘着性気質・緩慢性測定項目：10項目，粘着性気質・率直性測定項目：10項目，延べ86項目（なお，実際は２つの尺度に関係する項目が６項目あるため，80項目。なお具体的な項目内容は，Table 4に示す）[注4)]。なお，項目分析として各該当タイプの得点の高得点群（尺度得点の平均値より1SD以上の得点を示した群）と低得点群（同じく平均値より1SD以下の得点を示した群）を抽出し，各群の項目別反応率

注 4) 本研究で標準化を行ったTTIQ－性格検査を構成する項目として最終的に使用されたものは，類型尺度を構成する項目が80項目，特性尺度を構成する項目が60項目であるが，両者には一部共通項目が含まれているため，検査全体の総項目数は107項目となっている。これらの項目はランダムに配列されているが，最終的な項目の順序はTable4およびTable 8に示したとおりである。なお，実際に使用する場合には，状況に応じて虚偽尺度項目などを加えて実施することも可能である。

Table 3 タイプ別平均得点と標準偏差

		男性		女性	
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD
循環性気質型	高揚タイプ	25.7	7.83	25.0	6.80
	執着タイプ	24.3	5.71	24.3	5.25
分裂性気質型	敏感タイプ	18.1	7.77	17.2	7.08
	独自タイプ	18.2	7.92	16.7	7.07
粘着性気質型	緩慢タイプ	20.7	5.06	20.3	4.94
	顕示タイプ	21.1	4.79	20.0	4.90

の差(D)を算出した。ここではこれまでの研究結果にもとづき，6つのタイプ別に被験者をまとめている。したがって，それぞれのタイプの得点は，循環性気質・高揚タイプが“同調性”尺度の得点プラス“高揚性”尺度の得点，執着タイプが“同調性”尺度の得点プラス“執着性”尺度の得点，分裂性気質・敏感タイプが“分離性”尺度の得点プラス“敏感性”尺度の得点，独自タイプが“分離性”尺度の得点プラス“独自性”尺度の得点，粘着性気質・緩慢タイプが“直接性”の尺度の得点プラス“緩慢性”尺度の得点，顕示タイプが“直接性”尺度の得点プラス“顕示性”尺度の得点として算出されている。

結　果

1)　タイプ別平均得点と標準偏差

標準化の基準となるタイプ別平均得点と標準偏差はTable 3に示したとおりである。得点は，各質問項目に対して肯定的な回答をした場合(はい)に2点，どちらともいえないの場合には1点，否定的回答の場合（いいえ）には0点である（逆転項目の場合には，得点化の方向は反対になる)。ここでは，前述したように，各類型の基本項目と下位分類測定項目を合計したもの（例えば，循環性気質・高揚タイプの場合，同調性プラス高揚性）によって気質類型および下位類型（タイプ）を判定するので，平均得点と標準偏差は，下位分類ごとに算出してある。なお，各尺度別，男女別の粗点分布をFig. 3からFig. 8に示しておく。

2)　タイプ別項目反応率

その概要は，Table4に示したとおりである。Table 4には，男女別に，各該当タイプの高得点群（タイプの平均得点プラス1SD以上）と低得点群（タイプの平均得点マイナス1SD以下）の各項目への肯定的反応率（逆転項目については否定的反応率）の差と，他のタイプの高得点群と低得点群の同様の反応率の差を示してある。この反応率の差は，理論上は＋100から－100までをとりうるが，正の数値であれば高得点群の反応が多いことを，負の数値であれば低得点群の反応が多いことを示し，0であれば全く弁別力がないことを示すものである。例えば，ある項目で，

粗点	男性	女性	男性分布	女性分布
40	0.5	0.4	☆	
38-39	2.1	1.5	☆☆	☆☆
36-37	3.9	3.3	☆☆☆☆	☆☆☆
34-35	5.3	4.8	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
32-33	7.1	6.5	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
30-31	8.9	8.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
28-29	10.8	11.0	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
26-27	11.4	12.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
24-25	10.3	11.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
22-23	8.8	9.7	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
20-21	7.2	7.8	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
18-19	6.1	6.5	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
16-17	5.0	4.8	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
14-15	3.8	3.4	☆☆☆☆	☆☆☆
12-13	3.3	2.8	☆☆☆	☆☆☆
10-11	2.1	2.2	☆☆	☆☆
8- 9	1.3	1.3	☆	☆
6- 7	0.8	0.6	☆	☆
4- 5	0.6	0.3	☆	
2- 3	0.4	0.1		
0- 1	0.3	0.1		

Fig. 3　尺度別粗点分布（1）循環性気質型・高揚タイプ
数値は%，☆1つは1%を示す

粗点	男性	女性	男性分布	女性分布
40	0.4	0.3		
38-39	0.8	0.7	☆	☆
36-37	2.2	1.8	☆☆	☆☆
34-35	3.8	3.5	☆☆☆☆	☆☆☆☆
32-33	5.6	5.4	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
30-31	7.5	6.8	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
28-29	9.4	8.9	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
26-27	11.0	11.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
24-25	12.4	12.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
22-23	10.3	12.0	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
20-21	9.3	10.2	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
18-19	7.8	8.1	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	6.4	6.8	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
14-15	5.1	5.5	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
12-13	3.5	3.0	☆☆☆☆	☆☆☆
10-11	2.0	1.6	☆☆	☆☆
8- 9	1.4	0.5	☆	☆
6- 7	0.6	0.3	☆	
4- 5	0.3	0.3		
2- 3	0.2	0.1		
0- 1	0.1	0.0		

Fig. 4　尺度別粗点分布（2）循環性気質型・執着タイプ
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
40	0.3	0.2		
38-39	0.5	0.5	☆	☆
36-37	0.8	1.1	☆	☆
34-35	1.4	1.9	☆	☆☆
32-33	2.3	2.8	☆☆	☆☆☆
30-31	3.4	3.0	☆☆☆	☆☆☆
28-29	4.8	3.5	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆
26-27	6.5	4.6	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
24-25	7.6	5.8	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
22-23	7.9	7.7	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
20-21	8.6	8.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
18-19	9.8	10.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	9.5	10.3	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	8.7	8.9	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	6.9	7.5	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	6.3	6.6	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	4.7	5.4	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
6- 7	3.8	4.3	☆☆☆☆	☆☆☆☆
4- 5	2.6	3.1	☆☆☆	☆☆☆
2- 3	2.4	2.2	☆☆	☆☆
0- 1	1.2	1.4	☆	☆

Fig. 5 尺度別粗点分布（3）分裂性気質型・敏感タイプ
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
40	0.2	0.1		
38-39	0.5	0.3	☆	
36-37	0.7	0.6	☆	☆
34-35	1.3	1.0	☆	☆
32-33	2.7	1.8	☆☆☆	☆☆
30-31	3.5	2.5	☆☆☆☆	☆☆☆
28-29	5.0	3.2	☆☆☆☆☆	☆☆☆
26-27	6.4	4.4	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆
24-25	7.3	5.7	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
22-23	7.8	7.6	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
20-21	8.5	8.7	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
18-19	9.5	9.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	9.3	10.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	8.4	9.9	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	7.1	8.5	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	6.5	7.2	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	4.5	6.0	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
6- 7	3.9	4.8	☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
4- 5	3.1	3.5	☆☆☆	☆☆☆☆
2- 3	2.6	2.4	☆☆☆	☆☆
0- 1	1.1	1.4	☆	☆

Fig. 6 尺度別粗点分布（4）分裂性気質型・独自タイプ
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
40	0.1	0.1		
38-39	0.2	0.2		
36-37	0.5	0.4	☆	
34-35	1.0	0.8	☆	☆
32-33	2.2	2.1	☆☆	☆☆
30-31	3.7	3.8	☆☆☆☆	☆☆☆☆
28-29	5.6	5.5	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
26-27	7.5	8.3	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
24-25	10.8	9.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
22-23	11.8	10.3	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
20-21	14.4	12.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
18-19	12.3	12.2	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	10.4	10.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	7.5	8.5	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	5.5	6.6	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
10-11	3.4	4.6	☆☆☆	☆☆☆☆☆
8- 9	1.5	2.5	☆☆	☆☆☆
6- 7	0.7	0.9	☆	☆
4- 5	0.5	0.5	☆	☆
2- 3	0.3	0.2		
0- 1	0.1	0.4		

Fig. 7 尺度別粗点分布（5）粘着性気質型・緩慢タイプ
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
40	0.1	0.1		
38-39	0.2	0.2		
36-37	0.4	0.4		
34-35	0.8	0.9	☆	☆
32-33	2.0	1.7	☆☆	☆☆
30-31	3.5	3.3	☆☆☆☆	☆☆☆
28-29	5.6	4.9	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
26-27	7.6	6.8	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
24-25	10.8	9.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
22-23	12.6	11.2	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
20-21	13.8	12.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
18-19	12.0	12.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	10.4	10.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	7.5	8.5	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	5.5	6.6	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
10-11	3.5	4.5	☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
8- 9	1.8	2.5	☆☆	☆☆☆
6- 7	0.8	1.3	☆	☆
4- 5	0.5	0.7	☆	☆
2- 3	0.2	0.4		
0- 1	0.1	0.2		

Fig. 8 尺度別粗点分布（6）粘着性気質型・顕示タイプ
数値は%，☆1つは1%を示す

循環性気質・高揚タイプの高得点群の反応率が75%であり，低得点群の反応率が25%であれば，反応率の差は50.0となり，循環性気質・高揚性についての弁別力があることになる。

その結果をまとめてみると，循環性気質・同調性測定項目（共通項目）では，高揚性と執着性の両方の弁別力が高く（項目平均は各々男性65.6，53.2，女性62.5，46.8），他の尺度については一部を除いて弁別力を示していない。高揚性測定項目では，高揚性の弁別力が高く（男性49.8，女性49.0），執着性ではわずかの弁別力を示し（男性22.7，女性17.3）ているが，他の尺度については一部を除いて弁別力を示していない。執着性測定項目では，執着性の弁別力が高く（男性50.4，女性49.2），高揚性および他の

Table 4 タイプ別項目反応率の差(数値は各尺度の{$\bar{X}$ + 1SD以上群}−{$\bar{X}$ − 1SD以下群})

循環性気質型	男性						女性					
No. 共通項目(同調性)	高揚	執着	敏感	独自	緩慢	顕示	高揚	執着	敏感	独自	緩慢	顕示
95. 引込み思案の方である＊	78.1	58.1	-38.5	-23.7	-4.3	-8.3	75.7	48.5	-36.4	-22.7	-1.9	6.2
49. 知らない人とでもすぐ友達になれる	79.8	53.7	-29.9	-27.1	-10.7	10.2	70.1	39.1	-25.1	-17.2	-2.0	4.1
17. 何かをするときにはエネルギッシュである	71.9	64.5	-27.6	-19.8	5.8	11.6	71.5	59.5	-24.1	-18.6	8.3	10.8
98. 会合などで世話役をすることがある	71.1	51.7	-31.6	-26.1	4.3	10.2	70.4	50.1	-33.8	-28.9	6.1	19.8
27. 動作は活発なほうである	69.8	57.9	-29.3	-16.6	-2.8	9.5	78.4	62.0	-28.6	-17.2	-1.5	16.9
64. 人付き合いが下手なほうである＊	69.4	45.1	-33.5	-27.5	-20.6	-0.8	60.1	31.4	-31.2	-28.2	-7.5	3.3
38. 人から個人的な悩み事の相談をよくうける	67.8	59.2	-18.9	-18.3	0.4	0.8	52.0	41.0	-16.7	-17.0	-3.1	-1.6
78. 仕事はたいてい速いほうである	65.1	59.7	-22.2	-13.2	-15.6	5.6	64.0	59.0	-25.1	-12.8	-14.6	13.7
7. 物事はてきぱきと片付ける	62.9	61.8	-23.9	-18.4	-5.3	6.0	64.9	59.5	-27.6	-18.3	-4.7	14.2
100. 人前に出ると上がってしまう＊	60.3	48.7	-44.5	-28.2	-14.7	-0.2	52.5	41.2	-41.8	-28.5	-5.3	5.2
92. 思い立つとすぐ実行したくなる	44.6	37.9	-5.1	5.4	-2.5	31.1	49.3	37.5	-2.8	8.1	-5.9	34.6
89. 思ったことは相手に率直に伝える◆	46.6	40.6	-33.5	-21.3	41.5	56.1	41.2	33.2	-35.8	-18.1	46.3	63.2
(尺度平均)	(65.6)	(53.2)	(-28.2)	(-19.6)	(-2.0)	(11.0)	(62.5)	(46.8)	(-27.4)	(-18.3)	(1.2)	(15.9)

No. 高揚性測定項目	高揚	執着	敏感	独自	緩慢	顕示	高揚	執着	敏感	独自	緩慢	顕示
1. 気さくでだれとでもすぐ親しくなれる	75.6	43.9	-25.8	-19.0	-2.9	11.5	69.6	32.8	-23.7	-19.8	-3.2	24.7
32. いろいろなタイプの人と気軽に付き合うこと	68.5	37.8	-28.7	-23.2	-3.9	9.0	67.8	30.5	-29.6	-25.7	-3.9	21.6
87. 要領がよく融通がきく	64.6	29.1	-23.3	-18.6	-18.2	11.9	66.8	24.6	-34.2	-23.9	-22.4	-13.6
21. 物事に余りくよくよしない	54.8	11.7	-36.7	-27.7	-5.5	16.3	51.8	-0.4	-45.0	-36.7	-9.1	-0.4
54. 世話好きで,頼まれるといやと言えない	34.8	25.1	-8.8	-12.3	3.3	1.2	34.4	21.6	-8.4	-13.0	0.3	4.7
11. どちらかといえばのんきで朗らかである	31.2	-11.9	-10.0	-13.1	-6.9	1.6	30.6	-10.9	-13.0	-15.7	-7.9	-5.9
73. 情にもろい	30.1	12.9	2.3	0.2	0.6	4.3	30.7	11.9	1.3	-2.5	-0.3	15.8
42. 新しい流行などの情報に敏感である◆	38.8	32.6	-13.2	-11.1	-3.3	44.7	40.3	27.9	-20.3	-11.1	-5.8	51.0
(尺度平均)	(49.8)	(22.7)	(-18.0)	(-15.6)	(-4.6)	(12.6)	(49.0)	(17.3)	(-21.6)	(-18.6)	(-6.5)	(12.2)

No. 執着性測定項目	高揚	執着	敏感	独自	緩慢	顕示	高揚	執着	敏感	独自	緩慢	顕示
14. 他人の不正や怠慢に対しては追及をする	18.4	56.1	8.3	17.3	27.7	16.9	12.1	46.1	12.1	20.9	26.0	20.5
59. しなければならないことは徹夜をしてでも	23.6	49.5	-16.2	-14.1	20.0	-0.1	19.0	45.8	-15.7	-15.6	21.1	-17.0
67. 何事もいいかげんにごまかすことはできない	1.5	49.0	-6.4	-17.6	39.1	-9.4	-1.8	45.4	-4.2	-12.0	38.6	16.8
24. やり出したら最後までやり遂げなければ気が	12.4	45.7	-11.7	-9.5	34.5	3.1	9.9	44.0	-11.2	-9.7	35.6	13.2
45. 凝り性で物事に熱中しやすい	11.3	41.5	-4.1	-1.7	27.0	7.9	11.4	49.1	-4.2	-2.2	32.8	-11.7
83. 徹底的にやらないと気が済まない	19.9	56.9	-9.2	-3.4	37.2	22.9	16.6	58.7	-6.7	-1.3	42.7	33.8
4. 几帳面で何事もきちんとしなければ気が済ま	-6.6	46.7	16.2	7.1	35.6	-6.2	-4.8	49.7	9.8	-0.8	38.3	6.9
35. 正しいと思ったことは妥協せずに主張する◆	24.8	57.8	-5.3	8.5	47.5	43.3	19.6	55.0	3.5	16.6	46.2	44.4
(尺度平均)	(13.2)	(50.4)	(-3.6)	(-1.7)	(33.6)	(9.8)	(10.3)	(49.2)	(-2.1)	(-0.5)	(35.2)	(13.4)

分裂性気質型	男性						女性					
No. 共通項目（分離性）	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示
99. 不機嫌になることがときどきある	71.6	77.9	-15.0	-2.8	8.8	28.3	70.3	76.3	-17.6	-3.6	8.9	13.9
28. どうしていいのか決心のつかないことがある	75.9	53.1	-33.9	-24.1	-1.0	-3.7	73.8	49.0	-30.4	-17.1	-1.6	4.2
65. 思うように物事が進まないと投げ出したくな	68.6	68.4	-24.1	-34.4	-18.4	20.1	66.4	67.0	-20.6	-27.5	-18.5	18.0
79. 人と意見が合わずにイライラすることがある	64.1	70.1	-9.4	3.8	10.8	24.2	54.2	62.4	-8.8	5.2	8.9	-1.8
18. 自分の行動が人にどう思われているか気にな	69.6	50.9	-20.3	-2.5	-17.1	-15.1	57.9	38.0	-15.3	2.9	-21.0	10.8
39. 自尊心を傷つけられると腹が立つ	60.8	78.8	-0.7	16.7	12.5	28.1	61.9	79.1	-3.2	16.9	16.8	-13.2
50. 人から批判や忠告を受けると不愉快になる	56.7	62.2	-17.2	-10.1	0.7	14.8	50.1	57.6	-15.1	-7.7	-1.1	-6.9
8. 人から感情を傷つけられやすい	62.1	55.5	-21.8	-2.9	6.5	6.2	60.7	57.7	-19.0	4.8	8.2	5.2
93. 周囲の人と必要以上に接近したくない	56.4	66.4	-34.2	-19.7	5.3	10.1	45.8	60.4	-27.4	-11.3	7.4	14.2
107. 周囲の人から理解されないことが多い	51.2	51.1	-20.0	-7.7	5.5	9.5	35.2	37.3	-19.0	-5.6	4.9	29.4
90. 人に見られていると仕事ができない	54.4	45.1	-32.7	-20.8	2.1	0.4	55.1	47.3	-30.5	-19.7	1.6	37.2
105. 些細なことで喜んだり不機嫌になったりする◆	63.3	65.5	-11.8	0.1	5.3	55.4	59.8	62.1	-9.8	5.0	7.6	57.0
（尺度平均）	(62.9)	(62.1)	(-20.1)	(-8.7)	(1.8)	(14.9)	(57.6)	(57.9)	(-18.1)	(-4.8)	(1.8)	(14.0)

No. 敏感性測定項目	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示
43. 恥ずかしがりやなほうである	70.7	45.4	-38.2	-28.4	4.5	-9.1	67.3	36.5	-40.2	-24.3	7.1	23.9
12. 他の人より神経質な方である	64.0	45.3	-27.2	10.4	18.5	1.3	57.5	36.0	-24.2	20.7	24.0	0.7
74. 赤面しないかとときどき心配になる	53.8	32.2	-24.8	-15.4	1.5	-4.7	55.1	30.9	-23.3	-12.8	2.2	-25.4
55. 一人でいるほうが大勢でいるより気が楽で	49.1	36.2	-31.7	-18.0	8.1	1.6	42.5	31.9	-28.4	-11.9	7.3	20.5
22. 道で知人を見かけても会いたくないので避け	46.2	37.6	-24.4	-18.3	-2.1	3.1	45.6	41.4	-24.7	-15.6	-1.9	30.7
2. 緊張したり心配事があると身体の調子が悪く	45.9	29.7	-21.3	-9.6	5.8	1.0	50.8	33.3	-18.0	-1.5	7.9	5.4
33. 旅行をしたりすると寝つけないことがある	43.8	26.1	-16.5	-6.6	0.9	1.7	39.3	19.5	-15.9	-1.9	4.7	13.2
44. とかく物事を堅く考えがちである◆	46.7	37.5	-37.5	-3.8	55.3	-12.9	39.6	31.7	-37.5	3.1	46.7	-17.5
（尺度平均）	(52.5)	(36.3)	(-27.7)	(-11.2)	(11.6)	(-2.3)	(49.7)	(32.7)	(-26.5)	(-5.5)	(12.3)	(6.4)

No. 独自性測定項目	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示
46. 嫌いな人のことを無視してしまうことがある	51.6	69.3	-20.4	-12.2	3.2	23.2	40.5	58.4	-16.3	-7.2	2.6	12.3
60. 周囲の人との優劣に敏感である	44.0	62.9	-1.9	14.6	2.3	11.6	41.6	62.6	-3.2	16.0	3.1	14.9
5. プライドが高いほうである	25.0	55.5	7.0	22.5	14.8	28.9	24.8	57.1	6.0	20.1	14.4	-9.1
25. 世の中にはつまらない人間が多いと思う	39.0	52.8	-10.7	3.4	2.6	15.7	23.8	33.6	-5.7	0.2	2.4	25.2
68. 無能な人間が権利を主張していると腹が立つ	25.3	42.3	-4.9	2.1	5.2	14.3	20.1	35.5	-1.9	6.3	5.2	9.0
84. 人間関係よりも自分の考え方を重視する	14.2	29.7	-14.4	-3.5	14.6	15.0	8.5	30.8	-6.9	-0.6	9.5	19.8
15. 目的のためには周囲の思惑は気にならない	5.1	27.4	2.9	10.1	16.0	19.5	1.9	32.4	3.6	8.4	13.9	6.7
36. 見えっ張りである◆	35.3	48.3	13.0	15.4	2.3	54.6	36.5	50.8	6.4	13.2	3.0	54.5
（尺度平均）	(28.7)	(48.5)	(-3.7)	(6.6)	(7.6)	(22.9)	(23.5)	(42.7)	(-2.3)	(7.1)	(6.8)	(16.7)

粘着性気質型	男性						女性					
No. 共通項目（直接性）	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示
9. 頑固なほうである	58.4	40.3	0.6	24.4	24.6	32.0	63.0	40.1	-11.0	19.8	27.4	33.3
66. 理屈っぽい人間だといわれることがある	56.7	31.3	-17.2	6.3	23.6	24.7	47.9	33.6	-12.6	7.8	17.4	21.3
40. 周囲の人の思惑はあまり気にならない	41.4	42.1	15.3	1.2	-31.3	28.0	44.8	46.7	12.5	-2.9	-31.4	-24.0
80. 周囲の人の自分への評価が気になる＊	35.0	34.6	-14.2	-1.8	-32.7	-30.8	39.2	36.2	-10.8	-5.7	-30.7	-24.4
97. 我慢強いが時々カッとすることがある	35.6	30.8	7.4	12.4	23.6	29.7	44.1	33.3	3.2	14.7	26.0	30.3
19. 相手のペースに合わせることは苦手である	32.1	42.0	-19.8	-9.2	22.3	25.1	29.0	36.6	-11.5	-3.4	15.7	23.6
51. 過去や未来よりも現在を中心に考える	28.4	49.1	13.2	1.0	-7.2	-2.7	30.6	52.2	16.5	0.5	-11.8	-7.6
29. 控え目で自分の権利を主張できない＊	31.3	38.4	23.0	19.9	-30.5	21.7	34.5	42.5	25.6	23.9	-28.8	20.9
89. 思ったことは率直に相手に伝える◆	41.5	56.1	46.6	40.6	-29.6	-14.7	46.3	63.2	41.2	33.2	-17.8	-0.9
35. 正しいと思ったことは妥協せずに主張する◆	42.5	38.3	24.8	57.8	-5.3	8.5	46.2	44.4	19.6	55.0	3.5	16.6
（尺度平均）	(40.3)	(40.3)	(7.8)	(15.3)	(-4.3)	(12.2)	(42.6)	(42.9)	(7.3)	(14.3)	(-3.1)	(8.9)

No. 緩慢性測定項目	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示
96. 何かする前にじっくり計画を立てる	67.8	-17.3	-8.2	27.4	4.2	-2.7	71.1	-24.2	-6.7	27.8	1.2	-7.8
23. 几帳面である	61.4	-9.2	-5.6	35.2	12.7	2.9	66.1	-17.0	-4.6	39.6	6.6	-5.1
94. 納得がいくまでは容易に行動できない	58.8	-12.2	-36.6	-8.8	36.8	25.8	66.3	-14.6	-34.8	0.1	30.2	19.6
3. 何かを始めるとコツコツ粘り強くやる	55.6	-9.2	4.5	35.2	-13.0	-16.2	57.6	-13.6	0.7	34.0	-12.2	-15.5
56. 規則正しい生活が好きである	55.3	-12.9	7.9	24.1	-7.7	-14.9	46.7	-17.5	9.1	18.6	-11.8	-20.4
34. 物事は納得がいくまでよく考える	52.8	-1.5	2.3	29.7	-1.6	-1.9	55.8	-3.4	1.4	29.3	-2.0	-3.3
75. 用心深い	50.6	7.2	-22.0	8.3	32.3	22.8	54.3	-0.2	-23.2	11.4	25.3	13.2
13. 人から「しつこい」と言われることがある	44.2	17.2	-4.9	6.7	25.0	26.5	37.8	13.2	-7.0	4.6	23.0	25.2
88. 話し方がゆっくりでまわりくどい	29.2	-3.1	-24.4	-16.2	22.7	16.3	30.4	-1.8	-24.0	-15.2	17.2	11.2
44. とかく物事を堅く考える◆	55.3	-12.9	-37.5	-3.8	46.7	37.5	46.7	-17.5	-37.5	3.1	39.4	31.7
（尺度平均）	(53.1)	(-5.4)	(-12.5)	(13.8)	(15.8)	(9.6)	(52.3)	(-9.7)	(-12.7)	(15.3)	(11.7)	(4.9)

No. 顕示性測定項目	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示	敏感	独自	高揚	執着	緩慢	顕示
16. 話し方や身振りがおおげさである	4.7	62.0	32.2	23.1	1.2	10.3	2.5	60.1	27.8	21.1	9.0	16.6
61. 派手好きで注目を集めるのが好きである	-4.1	60.6	33.3	28.6	-2.8	11.7	-3.5	56.7	25.7	20.8	-2.8	11.7
47. いつも何か刺激を求めている	6.1	55.0	32.9	31.6	0.3	13.1	5.9	55.7	32.2	28.7	1.2	12.5
6. その時の気分でとっさに行動することがある	-10.1	52.5	15.1	5.1	23.8	31.7	-11.0	65.3	16.5	5.5	28.0	34.5
37. 先のことまで計画しても仕方がないと思う	-14.0	52.8	-9.9	-23.7	21.7	25.8	-8.4	53.2	-6.2	-17.1	16.8	23.9
85. めんどうなことを考えるのは苦手である	-18.7	47.7	1.0	-25.0	27.5	27.2	-18.7	55.3	3.1	-26.1	25.2	24.7
69. 人や物事の好き嫌いが強い	8.7	45.9	-18.0	-0.8	31.7	36.8	10.3	54.4	-15.3	3.8	32.9	37.8
26. 些細なことで喜んだり不機嫌になる◆	5.3	55.4	-11.8	0.1	63.3	65.5	7.6	57.0	-9.8	5.0	59.8	62.1
36. 見えっ張りである◆	2.3	54.6	13.0	15.4	35.3	48.3	3.0	54.5	6.4	13.2	36.5	50.8
42. 新しい流行などの情報に敏感である◆	-3.3	44.7	38.8	32.6	-23.2	-16.1	-5.8	51.0	40.3	27.9	-20.3	-11.1
（尺度平均）	(-2.3)	(53.1)	(12.7)	(8.7)	(17.9)	(25.4)	(-1.8)	(56.4)	(12.1)	(8.3)	(18.6)	(26.4)

＊は逆転項目、◆は複数の尺度で使用されている項目
（項目表現は一部省略されている）

尺度では一部を除いて弁別力を示していない。

次に，分裂性気質・分離性測定項目（共通項目）では，敏感性と独自性の弁別力が高く（各々男性62.9, 62.1，女性57.6, 57.9），他の尺度については一部を除いて弁別力を示していない。敏感性測定項目では，敏感性の弁別力が高く（男性52.5，女性49.7），独自性にもある程度の弁別力を示しているが（男性36.3, 女性32.7），他の尺度には一部を除いて弁別力を示していない。独自性測定項目では，独自性の弁別力が高く（男性48.5，女性42.7），敏感性についてもある程度の弁別力は示しているが（男性28.7，女性23.5），他の尺度には一部を除いて弁別力を示していない。

また，粘着性気質・直接性測定項目（共通項目）では，緩慢性と顕示性の弁別力が高く（各々男性39.3, 39.8，女性41.6, 42.4），他の尺度については一部を除いて弁別力を示していない。緩慢性測定項目では，緩慢性の弁別力が高く（男性53.1，女性52.3），顕示性および他の尺度については一部を除いて弁別力を示してはいない。顕示性測定項目では，顕示性の弁別力が高く（男性53.1，女性56.4），緩慢性および他の項目については一部を除いて弁別力は示されていない。

3) 3気質類型・複合構造モデルにもとづく類型の判定

本検査では，気質類型を判定することが，結果の表示において重要になってくる。判定の方法は，6タイプそれぞれの標準得点を基準として，標準得点が60点以上であれば，そのタイプの典型，55～59点であれば準型とみなすものである。以上の分類基準にもとづいて前述の被験者を分類判定した実際の出現率は，Table 5のとおりである。

4) 尺度間相関

次に，各気質類型別に，それを構成する尺度間の相関係数を求めると，Table 6のようになった。各類型とも，共通項目とタイプ測定項目の相関が比較的高く，タイプ測定項目間の相関はそれに比べて低くなっている。

Table 5 気質類型のタイプ別出現頻度(%)

		男性	女性
循環性気質	高揚タイプ	16.0	15.4
	執着タイプ	5.1	4.1
	循環タイプ	10.2	9.2
分裂性気質	敏感タイプ	11.8	13.7
	独自タイプ	5.3	4.5
	分裂タイプ	12.9	12.1
粘着性気質	緩慢タイプ	8.3	9.7
	顕示タイプ	6.9	5.8
	粘着タイプ	4.2	3.8
混合型		7.3	9.4
不定型		12.0	12.3

Table 6 気質類型別内部尺度間相関

同調性—高揚性	0.766
同調性—執着性	0.695
高揚性—執着性	0.451
分離性—敏感性	0.819
分離性—独自性	0.809
敏感性—独自性	0.708
直接性—緩慢性	0.643
直接性—顕示性	0.574
緩慢性—顕示性	0.156

考　察

“3気質類型・複合構造モデル”理論をもとに作成され標準化された検査の結果は，典型，準型合わせて混合型と不定型を除いたいずれかのタイプに判定されたものが男女とも約80%であり，類型判定力が優れていることがわかる。このことは，本検査の基礎となったVPIでは，混合型と不定型を除いた類型判定率が約65%程度であったことと比べても明らかである。

ここで類型の測定を尺度化された検査で行うことの是非が問題となるかもしれない。すなわち，本来，類型とは，質的に異なるものを直観的，全体的に把握するものとされており，尺度による表示とはなじまないものと考えられているからである。しかし，この点については，VPIの標準化においても検討されたように，実際上は問題はないと考えられる。すなわち，Tellenbach (1961) は類型について“1つの類型において概念的に重要なことは，その類型が確固たる中心を有することであって，画然たる境界が存することではない。我々は常に類型をただその核心において決定することはできるが，その境界を定めることはできない”と述べている。この考え方は重要なもので，本来類型論という考え方においては，最も普遍的なものから，個別的・一回的なものへの途中における中間節であり，理念型が明確であ

ることが重要なのである。その意味では，各タイプの典型的な特徴という中心にどの程度近いのかを標準得点によって表すことができる。またここでは，各タイプ（類型）を単一尺度では測定せず，気質類型を示す基本特徴の項目群とタイプ測定項目群という2つの尺度の合計として位置づけることによって，複雑な構造をもつ類型を一次元的尺度で測定することによる矛盾という問題点を解決しているのである。

ところで，ここで判定される9つのタイプを，従来の関連研究で記述されたパーソナリティ像に対応させてみると，次のようになるだろう。循環性気質型の高揚タイプは，Kretschmerの循環気質の軽躁的傾向が前面に出たものであり，軽躁性格，同調性格などといわれるものに対応し，執着タイプは，Kretschmerの循環気質の抑うつ的傾向が強いものであり，Tellenbachのメランコリー親和型性格，下田の執着性格などに対応する。そして循環タイプは，この両者の傾向を備えることから，軽躁的な面と抑うつ的な面をもった，いわゆる循環性格，躁うつ性格に対応すると考えられる。また，分裂性気質型の敏感タイプは，Kretschmerの分裂気質の過敏性気質を中心に，敏感性格，内閉性格などに対応し，独自タイプは，分裂気質の冷淡で鈍感な気質などにある程度対応する。そして分裂タイプは，この両者の傾向を備えることから，敏感であるとともに冷淡であるという，いわゆる分裂性格に対応すると考えられる。さらに，粘着性気質型の緩慢タイプは，粘着性格，類てんかん性格などに対応し，顕示タイプは，ヒステリー性格に対応すると考えられる。そして粘着タイプは，この両者の傾向をもつことから，安永の中心気質，木村の直接性などに対応すると考えられる。

ところで，各タイプの出現率をみると，興味深い点が認められる。すなわち，循環性気質型と分裂性気質型では，下位類型の中で2つの傾向を兼備するタイプ（循環タイプと分裂タイプ）が比較的多いということである。従来Kretschmerなどの類型論では，その類型がもつ内容が特性論的な観点からみれば一貫性に欠ける（あるいは矛盾する）点が問題とされてきた。こうした類型概念のもつ多義性を説明するために構成されたのが，本研究の類型モデルであり，それにもとづく質問紙であった。そして，実際にデータをとってみると，内容に比較的一貫性のある細分化された類型に該当するパーソナリティ傾向をもつ人とともに，内容が一貫しないようなパーソナリティ傾向をもつ人が存在することが確認されたのである。これは臨床的な記述においてはすでに知られていたものの，一般大学生のパーソナリティについて確認されたことは，類型論的なパーソナリティ把握が一般人を対象にしても有用性があることを示すものといえよう。この点からもKretschmerの類型論の重要性が（全面的ではないにしても）再認識される。

なお，各基本類型内の尺度間相関をみると，それぞれ共通項目とタイプ測定項目の間の相関の高さに比べて，タイプ測定項目同士の相関は低くなっている。これは本検査の理論的背景である3気質類型・複合構造モデルから考えれば当然のことであるが，基本類型間で比較すると相互にある程度の違いが認められている。すなわち，分裂性気質型においては，共通項目である分離性とタイプ測定項目である敏感性および独自性の相関が，$r=0.819$，および$r=0.809$とかなり高くなっているとともに，タイプ測定項目である敏感性と独自性の相関も$r=0.708$と比較的高くなっている。こうした傾向は循環性気質型でもみられており，同調性と高揚性の相関が$r=0.766$，同調性と執着性の相関が$r=0.695$，高揚性と執着性の相関が$r=0.451$となっている。これは，従来の精神病理学的研究において認められていた分裂性気質型や循環性気質型という大きな類型概念の中に，ある程度独立した下位類型が存在しており，その下位類型間にも共通性があることに対応している。これに対して，粘着性気質型は，共通項目である直接性とタイプ測定項目である緩慢性，顕示性の相関は，それぞれ$r=0.643$と$r=0.574$と比較的高いものの，タイプ特定項目同士である緩慢性と顕示性の相関は$r=0.156$と低くなっている。これはKretschmer以来，粘着性という類型概念が他の2類型と比べて把握しにくかったことと関係していると考えられる。すなわち，循環性気質における高揚性と執着性，分裂性気質における敏感性と独自性のそれぞれの関係が，表面的には対立しているように見えながら背後に共通性の存在を感じ取れるのに対し，従来の粘着性気質では，こうした対立しつつ共存するような構造的な内容に欠けていたからである。例えば，Kretschmerの粘着性概念は，本研究での緩慢性に対

応するものが中心であり，それ以外の内容はほとんど含まれていなかった。こうしたことが粘着性概念が循環性や分裂性に比べて対等な広がりをもっていないという指摘（例えば安永，1980など）につながり，また他の２類型に比べて研究が展開されなかった原因であったかもしれない。しかし，Janzの精神病理学的研究以降，粘着性の研究は再度深まりを見せ，いわゆるヒステリー性格（顕示性）と従来の粘着性格との関係が検討されるようになった（例えばRabe，1970；大原・工藤，1972)。また，この問題について若林（1994）は，一般大学生のパーソナリティにおいても同様の傾向があることを確認している。広い意味での粘着性気質を構成する両極性である緩慢性と顕示性は，他の気質の両極性に比べて直観的に把握しにくい傾向があるのであろう。確かに一般的な理解では緩慢性（従来の狭義の粘着性＝類てんかん性）と顕示性（従来のヒステリー性）は無関係どころか相反する傾向としてとらえられていた。しかし，JanzやTellenbachらの精神病理学的研究においても，また若林の一般大学生を対象とした研究においても，この両者は共通性をもち得ることが確認されたのである。しかし，ここでのデータからもわかるとおり，緩慢性と顕示性は，直接性という共通の傾向に対してはそれぞれ関係を示すものの，直接にはほとんど関連性が認められていない。そのために，粘着性本来の全体像が認められなかったのかもしれない。ただしここで興味深いのは，緩慢性と顕示性が小さい数値ながらプラスの相関を示しているということである。これは両者が少なくとも矛盾する傾向ではないことを意味するものであり，全体としては１つの類型としてのまとまりをもちうると考えられる。もちろん，ここで得られた傾向は，あくまでも質問紙法によって得られたものであり，パーソナリティの全体像を完全にとらえているとは限らないことはいうまでもない。

なお，循環性気質型と分裂性気質型については，尺度相互の相関係数が高いので，あえてタイプという下位分類に分けて測定する必要はないのではないかという疑問があるかもしれない。しかし，これは相関係数の数学的意味を考えれば，分けて測定する意義があることがわかる。すなわち，相関係数を単位ベクトルで表した場合，$r = \cos\theta$ であるから，最も相関係数の高い分裂性気質型を例にとっても，敏感性と独自性の相関係数 $r = 0.708$ は $\theta = 45°$ であり，個々に測定する意義があることがわかる。また，相関係数を二乗して得られる決定係数（一方の変数から他方の変数がどれだけ説明され得るかという分散の程度を示すもの）から検討すれば，同じく敏感性と独自性の決定係数は0.50であり，一方では説明され得ない分散の程度が50％もあることがわかる。このことからも，個々のタイプは独立して測定する必要があると考えられる。

以上のように，３気質類型・複合構造モデルにもとづいた尺度構成によって，パーソナリティの類型的把握を質問紙法によって適切に行うことが可能になったといえよう。

研究Ⅱ：パーソナリティの基本５特性次元の検討

パーソナリティの３気質類型・複合構造モデルでは，類型論的把握に加えて，特性論的測定も同時に行い，パーソナリティのフラクタル性という概念によって，類型論的理解と特性論的理解を統合した包括的なパーソナリティ理解を目指している。したがって，特性尺度についても必要十分なだけの内容を用意する必要がある。ここでは，類型測定項目と同様の方法によって，５つの特性次元を測定する項目について，VPIの項目をもとに再整理を行った。

ところで，パーソナリティを記述するのに必要とされる基本的特性次元の数は，研究者によってかなりの違いがあり，統一的見解はなかった。しかし，1980年代半以降，広い範囲の評定尺度を用いることによって，５つの次元でほぼパーソナリティを記述できるという一連の研究が欧米で報告されており（たとえばJohn, 1990），これをBig Five理論と呼んでいる。しかし，この流れとは別に，若林は，特性次元に関する一連の研究で，パーソナリティの自己評定と他者評定のいずれにおいても，パーソナリティ認知次元としては５つの特性次元が共通に用いられていること（1981），特性用語の評定からでも，行動記述に対する反応データからでも，５つの特性次元が共通に得られること，そして５つのパーソナリティ特性次元は類型カテゴリーとは比較的独立したものであること（1982a）を確認し，それを測定する質問紙法検査を作成し，標準化を行っている（若林，1982b：なお，これをさらに整理したものが，VPIの性格特性尺度である)。そして，そこで得られた５つの特性

次元の内容は，前述のBig Five理論における５次元とほぼ対応している。したがって，結果的には独立したアプローチによってパーソナリティ特性の基本次元を５次元で説明できることが確認されたといえよう。そこでここでは，VPIで使用された５尺度（因子論的に確認されている）をもとに，パーソナリティ特性次元を測定する尺度について再検討を行った。

目　的

類型とは別の観点に基づくパーソナリティ特性の基本次元を測定する尺度を構成し，それを標準化する。

方　法

さて，VPIにおいては，向性と情緒的安定性の尺度が各15項目，論理性と活動性の尺度が各８項目，慎重性の尺度が10項目との計56項目であった。これを，研究Ｉの気質類型測定尺度と同様の手続きによって，項目を整理し，各尺度12項目ずつの計60項目とした。回答は３件法により，被験者は研究Ｉと共通である。

結　果

各尺度の粗点分布はFig.9からFig.13に，平均得点と標準偏差は，Table 7に示したとおりである。また，各項目の帰属尺度に対する弁別力は，Table 8に示しておく。ここで明らかなように，５つの特性尺度を構成する項目は，いずれも該当尺度に対して一定の弁別力を示している。

また，各特性尺度と気質類型のタイプとの相関は，Table 9に示したとおりである。その中では，向性と循環性気質型・高揚タイプの間，情緒的安定性と分裂性気質型・敏感タイプおよび独自タイプの間に，$r = 0.5$から0.6という比較的目立った相関が認められているが，それ以外では，類型尺度から特性尺度を（あるいはその反対を）一定の割合以上に予測できることを示唆するような明瞭な相関関係は認められていない[注5)]。

考　察

パーソナリティ特性の基本的な次元を５つで説明することが妥当であることは，本研究の前提となった一連の研究およびBig Five関連の研究によって確認されている。問題は，この５つの特性次元によってパーソナリティをどの程度包括的にとらえることができるのかということである。この点については，今回のデータを検討することによって，興味深いことがわかる。すなわち，５つの特性尺度と３気質類型・複合構造モデルを構成する尺度との相関を求めた結果，一部では類型尺度と特性尺度の間に重複する部分はあるものの，一方では相互に比較的独立している部分もあることから，パーソナリティを包括的に理解するためには，両者をそれぞれ測定する意味があると考えられるのである。このことは，気質類型で測定されるパーソナリティの側面と性格特性次元で測定されるパーソナリティの側面が，因子論的にみてもある程度異なっており，それゆえ両者を統合的に使用してパーソナリティを測定することが望ましいということを示していると考えられる。したがって，この点はVPIの標準化に関する論文の中で指摘しておいた点とも一致している。今回，類型の設定を従来の３類型から細分化したにもかかわらず，結果的には類型と特性次元がやはりある程度独立していることが確認されたということは，パーソナリティの把握においては類型論的把握と特性論的記述のどちらか一方だけでは不十分であり，両者をともに使用することによってパーソナリティの全体像が明らかになることが再確認されたといえよう。その意味では，５つのパーソナリティ特性次元は，特性次元としてはかなり共通性，普遍性があるものの，それだけで十分なパーソナリティ記述ができるわけではないということが明らかになったともいえる。したがって，パーソナリティ測定における特性次元の使用は，類型論的把握と併用してこそ有効に活用されるといえよう。

なお，類型論的アプローチも特性論的アプローチも，パーソナリティを効率的に記述説明するという

注5)　相関係数の大きさの解釈については，統計学的にみても明確な基準は存在しない。一般的には検定の結果をもとに２変数間の関係を解釈することが多いが，標本数が大きくなると r の絶対値がかなり小さくても有意となってしまうため，それほど有効な方法ではない。たとえば，$N = 1000$の場合，$r = 0.081$で１％水準で有意差があることになる。しかし，この場合の一方の変数から他方の変数がどれだけ説明されうるかという分散の程度を示す決定係数（r^2）は0.00656であり，実際上は無関係に等しい。さらに，相関係数の検定の結果有意であることが“２変数が無関係であることが否定される”ことを意味するものであり，“関係がある”ことを直接意味するものではないという点も考慮する必要がある。こうしたことから，ここではNの大きさも考慮した上で，本文中のような解釈を行った。したがって，ここで得られた結果について，他の解釈も可能である。

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
24	1.6	1.2	☆☆	☆
22-23	3.8	2.8	☆☆☆☆	☆☆☆
20-21	5.7	5.2	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
18-19	8.5	9.0	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	12.7	14.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	15.4	17.5	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	16.2	17.9	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	13.3	14.3	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	8.6	7.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
6- 7	6.7	5.5	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
4- 5	4.0	2.7	☆☆☆☆	☆☆☆
2- 3	2.4	0.9	☆☆	☆
0- 1	1.1	0.4	☆	

Fig. 9 尺度別粗点分布（7）向性
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
24	1.2	0.3	☆	
22-23	3.3	2.3	☆☆☆	☆☆
20-21	5.4	5.1	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
18-19	8.3	7.7	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	11.7	11.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	13.8	14.3	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	16.0	15.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	14.2	13.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	11.4	12.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
6- 7	7.7	7.8	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
4- 5	4.5	4.7	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
2- 3	1.9	3.4	☆☆	☆☆☆
0- 1	0.6	1.1	☆	☆

Fig. 12 尺度別粗点分布（10）活動性
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
24	1.3	1.0	☆	☆
22-23	2.8	3.2	☆☆☆	☆☆☆
20-21	5.3	5.9	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
18-19	7.7	9.2	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	11.2	13.1	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	14.2	16.3	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	15.3	16.1	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	13.7	12.7	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	10.7	8.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆
6- 7	7.5	5.5	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆
4- 5	5.1	3.1	☆☆☆☆☆	☆☆☆
2- 3	3.4	1.5	☆☆☆	☆☆
0- 1	1.8	0.4	☆☆	

Fig. 10 尺度別粗点分布（8）情緒的安定性
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
24	2.4	3.2	☆☆	☆☆☆
22-23	4.7	5.3	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
20-21	8.0	7.4	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
18-19	11.8	11.0	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
16-17	13.8	14.1	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	15.3	15.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	13.4	13.9	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	11.9	11.3	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	7.7	7.1	☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆
6- 7	4.5	4.8	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆
4- 5	3.4	3.1	☆☆☆	☆☆☆
2- 3	2.0	1.9	☆☆	☆☆
0- 1	0.8	1.1	☆	☆

Fig. 13 尺度別粗点分布（11）慎重性
数値は%，☆1つは1%を示す

粗 点	男性	女性	男性分布	女性分布
24	0.4	0.0		
22-23	1.2	0.4	☆	
20-21	3.4	1.5	☆☆☆	☆☆
18-19	5.8	3.8	☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆
16-17	9.2	7.5	☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
14-15	12.1	13.2	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
12-13	15.4	15.6	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
10-11	16.1	17.4	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
8- 9	13.4	14.5	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
6- 7	10.1	12.8	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
4- 5	6.8	7.7	☆☆☆☆☆☆☆	☆☆☆☆☆☆☆☆
2- 3	3.7	3.9	☆☆☆☆	☆☆☆☆
0- 1	2.4	1.7	☆☆	☆☆

Fig. 11 尺度別粗点分布（9）論理性
数値は%，☆1つは1%を示す

Table 7 5特性次元の平均得点と標準偏差

	男 性		女 性	
	$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD
向 性	13.2	4.80	13.4	4.10
情緒的安定性	13.0	4.69	13.5	4.22
論 理 性	11.3	4.42	10.9	4.13
活 動 性	12.7	4.70	11.8	4.62
慎 重 性	13.7	4.59	14.3	4.71

Table 8 性格特性尺度項目反応率の差(数値は表4と同じ算出法による)

		男性					女性				
No.	**向　性**	向性	情緒	論理	活動	慎重	向性	情緒	論理	活動	慎重
95.	引っ込み思案の方である＊	89.4	37.3	-5.1	43.5	-25.6	84.4	34.8	0.5	38.6	-23.2
72.	何事にも積極的なほうである	86.0	29.2	-1.8	48.1	-12.4	84.5	22.9	4.4	48.5	-16.4
49.	知らない人とでもすぐ友達になれる	85.7	24.0	-4.6	32.1	-13.7	71.8	21.6	-1.4	20.8	-8.9
1.	気さくで誰とでもすぐに親しくなれる	81.2	31.2	-5.2	28.0	-13.2	67.1	20.3	-3.1	28.8	-8.1
64.	人付き合いが下手なほうである＊	79.5	31.1	-7.9	27.4	-17.2	62.8	25.8	-5.0	26.0	-9.3
29.	控え目で自分の権利を主張できない＊	75.6	35.5	-1.0	32.9	-21.8	71.4	23.8	5.8	33.2	-23.4
100.	人前に出ると上がってしまう＊	75.5	35.5	-2.0	34.2	-21.8	64.9	27.1	4.8	33.7	-22.6
43.	恥ずかしがりやな方である＊	75.2	39.8	-4.7	35.1	-21.9	75.7	34.7	0.9	35.1	-25.8
32.	いろいろなタイプの人と気軽に付き合うことができる	75.0	36.5	-4.0	34.1	-13.3	65.8	28.1	-0.8	30.1	-9.9
98.	会合などで世話役をすることが多い	72.0	25.2	5.8	39.9	-6.2	66.1	24.0	12.5	41.7	-3.9
89.	思ったことは相手に率直に伝える	64.5	3.9	3.6	37.6	-12.7	55.9	11.1	8.9	35.8	-19.5
55.	一人でいるほうが大勢でいるよりも気が楽である＊	55.1	29.7	-10.4	17.4	-12.7	50.3	26.8	-11.1	15.9	-6.0
	(尺度平均)	76.2	31.6	-3.1	34.2	-16.0	68.4	25.1	1.4	32.4	-14.8

No.	**情緒的安定性**	向性	情緒	論理	活動	慎重	向性	情緒	論理	活動	慎重
101.	何かした後で後悔することが多い＊	30.0	80.1	-7.6	22.5	-13.6	23.7	73.5	-4.9	19.5	-11.8
79.	人と意見が合わずにイライラすることがある＊	14.9	75.3	-9.1	-0.7	-3.3	11.7	68.1	-10.5	-3.8	2.4
8.	人から感情を傷つけられやすい＊	28.2	74.2	-12.4	12.9	-17.0	24.3	69.9	-11.4	9.9	-16.2
102.	人の考えや行動を悪く解釈することがある＊	23.8	72.7	-9.0	8.5	-1.3	22.4	70.5	-8.2	8.0	-0.6
99.	不機嫌になることがときどき(しばしば)ある＊	22.6	72.7	-8.0	7.0	-0.4	22.8	70.8	-8.1	6.7	4.8
21.	ものごとにあまりくよくよしない	34.2	71.4	-9.7	30.9	-30.4	26.9	67.1	-3.5	26.6	-34.9
65.	思うように物事が進まないと投げだしたくなる＊	26.0	68.6	0.1	21.9	15.0	20.4	64.0	3.1	15.9	20.3
50.	人から批判や忠告を受けると不愉快になる＊	22.9	65.3	-1.3	6.9	-1.8	19.2	60.4	-1.4	3.5	3.3
39.	自尊心を傷つけられると、ひどく腹が立つ＊	5.6	62.0	-13.3	-6.3	-7.7	7.9	61.7	-18.5	-8.9	-4.5
90.	人に見られていると仕事ができない＊	32.9	58.9	-6.7	25.6	-12.2	32.7	58.1	-3.2	26.6	-8.8
12.	他の人より神経質なほうである＊	26.8	58.3	-14.6	12.3	-35.9	22.5	57.0	-13.1	9.4	-40.4
2.	緊張したり心配事があると身体の調子が悪くなる＊	26.8	54.8	-6.3	15.1	-12.2	21.6	57.4	-6.8	12.7	-11.4
	(尺度平均)	24.6	66.5	-8.6	11.8	-10.5	21.3	62.8	-7.4	9.4	-8.9

No.	**論理性**	向性	情緒	論理	活動	慎重	向性	情緒	論理	活動	慎重
41.	ものごとを理論的に考えるのが好きである	-3.2	-2.1	77.2	-5.4	31.8	3.2	-1.3	83.1	1.3	29.8
76.	人を説得するときには感情より理性に訴える	-6.4	4.0	75.5	-6.7	24.2	3.3	6.4	75.4	1.7	18.7
48.	ものごとを感情よりも理屈で判断することが多い	-14.9	-7.1	74.5	-12.7	26.7	-5.8	-0.6	71.8	-6.6	22.8
10.	理論的に説明されないと納得しないほうである	-12.7	-26.6	70.8	-7.6	27.6	-7.8	-25.8	73.5	-2.0	20.5
57.	ものごとを理屈で割り切っていくほうである	-16.4	-21.8	67.7	-9.6	21.1	-7.1	-13.4	66.1	-0.8	10.0
70.	直接的な判断よりも理詰めでものを考える	-14.6	-10.3	66.4	-16.9	40.3	-13.4	-10.6	58.9	-17.3	39.2
66.	理屈っぽい人間だといわれることがある	-13.5	-29.6	57.8	-8.8	21.1	-7.2	-19.8	51.0	-3.1	10.5
82.	緻密な考えを必要とする仕事が好きである	-2.1	4.6	56.9	0.1	38.1	4.7	6.0	54.7	3.8	36.0
30.	議論をすることが好きなほうである	28.7	11.9	50.0	25.3	2.6	23.5	5.4	62.4	27.2	-7.3
52.	主観的な意見を聴くと、反論したくなる	-3.4	-30.9	41.3	2.6	-1.6	-0.2	-21.9	41.8	4.8	-7.4
63.	抽象的な問題を考えるのが好きである	2.4	-10.4	41.2	1.5	4.6	7.2	-4.9	47.2	4.5	-4.2
20.	クイズやパズルが好きである	-0.6	1.6	37.9	2.3	12.8	0.2	2.2	39.1	2.2	10.5
	(尺度平均)	-3.1	-9.7	59.8	-3.0	20.8	0.1	-6.5	60.4	1.3	9.5

No.	活動性	向性	情緒	論理	活動	慎重	向性	情緒	論理	活動	慎重
78.	仕事はたいてい早いほうである	27.6	28.4	3.1	82.1	-11.1	25.1	20.9	9.1	84.5	-8.8
81.	人より先にものごとを始めることが多い	33.7	23.6	6.7	76.6	0.0	30.0	17.5	12.1	77.3	2.5
7.	物事はてきぱきと片付けるほうである	27.3	32.7	3.8	74.0	2.8	26.3	25.5	8.2	75.4	0.9
27.	動作は活発なほうである	41.0	29.8	-3.1	69.2	-11.0	41.5	23.1	2.3	79.6	-13.0
103.	仕事はマイペースでゆっくりやるほうである＊	28.8	25.0	-0.2	69.0	-14.1	21.3	18.6	5.4	71.1	-11.1
91.	考えるより、まず行動することが多い	35.5	15.4	-26.8	69.0	-49.3	29.0	9.5	-15.1	69.6	-58.6
17.	何かをするときにはいつもエネルギッシュなほうである	43.9	29.6	-4.7	65.7	-5.6	35.3	22.8	-0.8	63.1	-4.2
77.	話したり歩いたりするときのテンポは速いほうである	26.9	0.6	10.8	56.5	0.4	25.2	-3.4	15.7	68.1	-3.3
92.	思い立つと、すぐ実行したくなる	24.1	-0.4	-7.1	51.5	-24.8	22.8	-1.6	-3.9	54.2	-34.1
62.	仕事などの速さを人と競争するのが好きである	20.2	-4.1	11.1	51.0	-4.0	12.7	-6.7	15.7	41.1	-4.3
31.	持久戦は苦手である	19.8	-12.6	-7.9	46.6	-24.2	22.6	-9.9	-1.7	55.1	-27.2
58.	じっとしているよりも、体を動かしている方がいい	25.5	12.9	-10.2	44.3	-8.0	30.5	13.1	-7.8	53.7	-12.9
	(尺度平均)	29.5	15.1	-2.0	62.9	-12.4	26.9	10.8	3.3	66.1	-14.5

No.	慎重性	向性	情緒	論理	活動	慎重	向性	情緒	論理	活動	慎重
86.	ちょっとしたことにも慎重なほうである	-26.9	-34.9	21.0	-21.1	82.1	-21.3	-24.9	13.7	-22.7	87.6
4.	几帳面で何事もきちんとしなければ気が済まない	-7.3	-14.1	12.1	3.4	78.9	-7.0	-9.4	7.5	0.7	82.6
96.	何かする前にじっくり計画を立てるほうである	-3.8	-1.5	24.2	-5.3	77.6	-2.6	0.8	19.1	-7.8	79.7
23.	几帳面である	-6.8	-10.1	13.3	2.6	74.2	-6.3	-6.0	9.8	0.0	78.5
104.	何事も納得がいくまでは容易に行動に出られない	-32.6	-27.8	20.7	-34.4	67.4	-26.0	-22.9	17.0	-34.9	76.1
53.	実行する前に考え直してみることが多い	-26.9	-23.7	24.1	-30.6	65.6	-20.3	-16.0	20.0	-30.2	68.6
71.	何事もじっくり考えてみないと気が済まない	-12.7	-19.9	27.0	-13.0	64.8	-9.8	-17.1	19.2	-15.9	66.7
75.	用心深いほうである	-22.4	-26.7	17.9	-16.8	59.9	-21.7	-19.4	13.1	-21.0	67.8
67.	何事もいいかげんにごまかすことができない	3.1	7.6	5.7	5.6	53.7	-0.2	4.2	1.8	-0.3	53.5
44.	とかく物事を堅く考えがちである	-29.8	-38.3	17.6	-27.8	52.4	-24.7	-30.4	16.6	-24.8	55.5
56.	規則正しい生活が好きである	6.0	11.0	4.7	10.6	52.5	6.4	14.9	0.0	6.6	48.4
106.	あれこれと考えを巡らして取越苦労をしやすい	-28.0	-43.6	19.9	-26.3	49.8	-22.1	-45.1	16.0	-23.6	54.5
	(尺度平均)	-15.7	-18.5	17.4	-12.6	64.9	-13.0	-14.3	12.8	-14.5	67.9

＊は逆転項目，番号は項目番号

Table 9　5特性次元と気質類型のタイプとの相関

	向　性	情緒的安定性	論理性	活動性	慎重性
循環・高揚タイプ	.571	.140	-.067	.470	-.257
	.539	.205	-.078	.458	-.301
執着タイプ	.333	.008	.075	.359	.213
	.327	-.041	.161	.277	.233
分裂・敏感タイプ	-.372	-.658	.142	-.209	.211
	-.349	-.638	.112	-.209	.195
独自タイプ	-.168	-.508	.190	-.082	.088
	-.171	-.584	.152	-.065	.041
粘着・緩慢タイプ	-.048	-.095	.266	-.018	.433
	-.064	-.101	.274	-.091	.501
顕示タイプ	.264	-.170	.033	.262	-.183
	.266	-.178	.058	.229	-.247

数値は、上段が男性、下段が女性

目的においては共通していることから，その理論的背景は異なるにしても結果的には両者は完全に独立したものとはならないとも考えられる。このことが，循環性気質型・高揚タイプと向性，分裂性気質型・敏感タイプおよび独自タイプと情緒的安定性などに認められた一部の関係として表れたとみることもできよう。もちろん，本研究においては，使用項目の重複という事情もあるため，両者の関係が明瞭化したとも考えられる。しかし，ここで認められた相互関係は，従来のパーソナリティ研究の結果からみても妥当な内部関連でもあり，すべての特性次元が類型と完全な独立性をもつということは，現実的には困難なことなのかもしれない。結局，ここで重要なことは，たとえば類型論的にみて循環性気質型の人は特性論的にみて外向的な人が多いことは否定できない事実であるとしても，循環性気質型だから外向的であるとは限らないというように，類型と特性の両方の観点から記述説明することによってパーソナリティをより包括的に理解することができるという点であろう。

研究Ⅲ：気質類型・性格特性測定尺度の信頼性の検討

目　的

研究ⅠおよびⅡで標準化された気質類型と性格特性を測定する各尺度について，その信頼性を検討する。

方　法

信頼性の検討は，再検査法による。具体的には，本研究で標準化された尺度を構成する項目群を印刷した質問紙を，同一の被験者群に1－2か月程度の間隔をおいて2度実施し，各尺度（気質類型では基本項目プラスタイプ測定項目）の得点の両検査間での相関を求めた。

被験者：大学生男子726名，女子373名（2回の検査の両方に回答したもの）。

結　果

再検査法による各尺度の信頼性係数をTable10に示す。すべての尺度において信頼性係数が0.8から0.9を示しており，信頼性が高いことがわかる。

考　察

心理検査の信頼性を確認するための一般的な方法である再検査法を行った結果，一定の水準の信頼性係数を得た。ここで信頼性係数の数値について考えてみると，一般的に，能力を測定する検査（例えば知能検査）に比べて，パーソナリティを測定する検査の方が信頼性係数が低くなる傾向があるといわれている。これはパーソナリティ検査の方が信頼性が低いことを意味しているわけではなく，測定している対象の性質の違いが反映されていると考えるべきである。すなわち，成人を対象にした場合，一定の期間内では，能力にはほとんど変動が表れないのに対して，パーソナリティ傾向には環境的要因による影響があり，個々のパーソナリティ傾向（項目レベル）に関してはある程度の変動がありうるためである。このような点を考慮してみると，ここで得られた信頼性係数の値は十分満足することができるものといえよう。また，気質類型に関しては，実際上は基本項目の尺度とタイプ測定項目の尺度を合わせたものを扱っているので，単一次元による尺度に比べて信頼性係数の値は理論的にみて当然低くなる傾向がある。それを考慮に入れて考えると，ここでの気質類型の尺度の信頼性は，かなり高いものということができる[注6)]。

なお，妥当性についてであるが，気質類型関連尺度は，3気質類型・複合構造モデルを構築する過程において，理論的ならびに臨床的に十分な検討が行われており，実際の測定結果についても従来のパーソナリティ類型論で記述されたパーソナリティ像と対応していることから，ほぼ保証されていると考えられる。また，性格特性次元尺度は，その背景となったVPIならびにBig Five関連研究によって確認されている。したがって，本研究では改めて検討することは省略した。

全体的考察

本研究の目的は，パーソナリティの新しい類型モデルを構築するとともに，それを反映した類型論と特性論を統合した質問紙法検査を作成することであっ

注6)　この結果は，パーソナリティ測定尺度による行動の予測に関する単一行動基準と多重行動基準の問題と結びつけて考えると興味深い示唆が得られる。すなわち，行動とパーソナリティ測度の間に高い相関が認められるのは複数の行動を考慮した場合（多重行動基準）であることが報告されているが（Weigel & Neuman, 1976など），類型尺度の方が特性尺度に比べて内容的により多くの行動傾向を含んでいることから，類型概念は多重行動基準の指標であると考えることもできるであろう。

Table 10 気質類型・性格特性次元両尺度の信頼性係数

	男性	女性
循環性・高揚タイプ	.891	.893
執着タイプ	.855	.856
分裂性・敏感タイプ	.883	.886
独自タイプ	.875	.876
粘着性・緩慢タイプ	.822	.838
顕示タイプ	.807	.828
向性	.871	.878
情緒的安定性	.851	.876
論理性	.848	.834
活動性	.873	.894
慎重性	.887	.917

た。

類型モデルの設定については，従来の3気質類型モデルを基本として，一般大学生のデータを用いて，3気質類型・複合構造モデルを構築した。このモデルは，3つの基本的気質類型が，それぞれ基本（共通）特徴と2つの表面的には異なる特徴をもつ下位類型によって構成されていると考えるもので，こうした構造的な理解によって，従来の類型論にみられた理論的矛盾や検査理論との整合性の悪さを説明することが可能になった。また，一般の被験者をデータに用いたモデルでありながら，精神病理学的に記述されたさまざまなパーソナリティ像に対応させることが可能であり，対象の正常異常にかかわらないパーソナリティの基本類型を説明するモデルとしての妥当性が示唆された。これによって，これまでパーソナリティ研究の分野では古典的なものと見なされがちであった類型論が，適切な類型モデルを使用することを前提にすれば，パーソナリティの理解において有効であることが再確認された。

一方，類型論と特性論を統合する考え方については，すでにVPI作成時に提示したように，類型という質的相違を示す概念と特性という量的相違を示す概念との本質的な違いを反映するために，まず個人のパーソナリティ類型を判定し，その上で性格特性次元上のプロフィールをみていくという考え方をとっている。したがって，そこでは同じ類型に判定されても特性プロフィールが異なる場合もあれば，特性プロフィールが類似していながら類型は異なるという場合も考えられる。このような考え方は，従来一般的であった特性の上位概念として類型を位置づけることで両者を統合するという考え方とは根本的に異なるものである。例えばEysenckなどに典型的にみられるような階層構造では，“bottom-up”的なパーソナリティ構造が仮定されており，特性次元上のプロフィールのパターンによって類型が決定されることになるのであるが，本研究で提示した類型と特性の統合についての考え方は，類型と特性次元を独立に考え，個人のパーソナリティの類型による位置づけをさらに特性次元上のプロフィールによって個別化するとともに，特性次元上の傾向の表現型的ニュアンスを属する類型によって色づけるという相互浸透的な関係が仮定されているのである。そして，関連研究で明らかにされた傾向を参考に，基本3気質類型の位置づけを重視し，特性次元上に表れたパーソナリティ傾向という“部分”に，気質類型という“全体性”が含まれているという自己相似的入れ子構造を想定することによって，これをパーソナリティのフラクタル性として数学的に理論化することが可能になると考えられる。こうした考え方は，すでにVPIの作成段階においてある程度表明されていたが，類型概念に3気質類型・複合構造モデルを適用した今回の研究によって，さらに明確化したといえよう。この結果をもとに，今回標準化された尺度による質問紙法検査を“類型・特性統合検査（Type-Trait Integrated Questionnaire: 略称TTIQ）”と呼ぶことにする。

以上のように，類型論的アプローチと特性論的アプローチの合理的な統合によって，客観的な標準化された指標を使用しながら，パーソナリティの個別的記述（測定）が可能になった。これはパーソナリティ研究における究極の課題の一つである個性記述的アプローチと法則定立的アプローチをともに満足させたパーソナリティ理論ということもできるであろう。

なお，今後の課題としては，理論的にはパーソナリティのフラクタル性に関する数理モデルの検討が残されているとともに，実践的には大学生以外の対象（特に20歳台後半以降の年齢層）のデータを収集し，年齢段階別標準化を行うことによって本検査の適用範囲を拡大することが残されている。

付記

本研究に関するデータ収集は，（株）日本経営協会総合研究所の協力を得ている。なお，標準化のためのデータ収集期間は，1992年4月1日から9月30日の6ヶ月間である。

文　献

青木孝悦　1976　多数の性格領域から得られた性格構造　心理学研究，**47**，239-249.

Arieti, S. 1955　*Interpretation of schizophrenia.* Basic books, New York.

Arnold, W. 1969　*Person, Charakter, Persönlichkeit.* Verlag für Psychologie, Göttingen.

Binswanger, L. 1957　*Schizophrenie.*　G. Neske, Pfullingen.（新海・宮本・木村訳，1960-61　精神分裂病　Ⅰ，Ⅱ　みすず書房）

Bleuler, E. 1911　*Dementia praecox oder Gruppe der Schizophrenien.*　F. Deuticke, Leipzig.

Bleuler, E., & Bleuler, M. 1960　*Lehrbuch der Psychiatrie.*　10. Aufl. Berlin, Springer.

Bumke, H. 1932　*Handbuch der Geisteskrankheiten, Die Schizophrenie.*　Springer, Berlin.

Edwards, A. L. 原著，肥田野直・岩原信九郎・福原真知子訳編　1970　EPPS検査手引，日本文化科学社.

Enke, H. 1953 Beitrag zur Psychologie des Athletikers, *Zeitschrift für Menschliche Vererbungs und Konstitutionslehre,* **31,** 341-358.

Essen-Möller, E. 1946 The concept of schizoidia. *Monatsschrift für Psychiatrie und Neurologie,* **112,** 258-266.

Ey, H. 1975 Groupe des schizophrenies. *Encyclopedie Medico-Chirurgicale, Psychiatrie,* E. M. C., Paris.

Eysenck, H. J. 1953　*The structure of human personality.*　Methuen, London.

布施邦之　1960　反応性うつ病の力動的構造に関する臨床的研究　精神神経学雑誌，**62,** 1392-1413.

Hecker, E. 1871 Die Hebephrenie. *Virchow's Archiv für pathologische Anatomie und Physiologie für Klinische Medizin,* **52,** 394-429.

平沢　一　1962　うつ病にあらわれる執着性格の研究　精神医学，**4,** 229-237.

保科泰弘　1962　うつ病者に対するTATの研究　精神神経学雑誌，**64,** 733-742.

Janz, D. 1962 Differentialtypologie der idiopathischen Epilepsie. : In Kranz, H. (Hrsg.) *Psychopathologie Heute.* Thieme, Stuttgart.

Janz, D. 1968　*Die Epilepsien. Spezielle Pathologie und Therapie.*　Thieme, Stuttgart.

John, O. P. 1990 The "Big Five" factor taxonomy: Dimensions of personality in the natural language and in questionnaires. In L. A. Pervin (ed.) *Handbook of personality: Theory and research.* Guilford, New York.

Kahlbaum, K. L. 1874　*Die Katatonie oder das Spannungsirresein, Eine klinische Form psychischer Krankheit.*　Hirschwald, Berlin.

河合逸雄　1972　てんかん患者の神経症状態　—覚醒てんかんの精神病理学的研究．精神神経学雑誌，**74,** 38-51.

木村　敏　1974　てんかん者の精神病理　—人間学的考察．原俊夫他編　てんかんの臨床と理論，医学書院.

木村　敏　1976　分裂病の時間論　—非分裂性妄想病との対比において—　笠原　嘉編　分裂病の精神病理5東京大学出版会.

木村　敏　1986　直接性の病理．弘文堂.

Kraepelin, E. 1927　*Kompendium der Psychiatrie.*　9. Aufl.　Abel, Leipzig.

Kraus. A. 1977　*Sozialverhalten und Psychose manisch-depressiver.*　Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart.

Kretschmer, E. 1955　*Körperbau und Charakter,* 22. Aufl. Springer, Berlin.

Kretschmer, E. & Enke, W. 1936　*Die Persönlichkeit der Athletiker.*　Thieme, Leipzig.

桑原知子　1980　人格の二面性について　—質問紙法による測定の試み—　日本心理学会第44回大会発表論文集24.

Leder, A. 1969　*Aufwachepilepsie. Eine testpsychologische Untersuchung.*　Huber, Stuttgart.

町山幸輝・大橋秀夫　1975　精神分裂病患者の病前行動特性　臨床精神医学，**4,** 163-173.

Mandelbrot, B. B. 1977　*Fractals: Form, chance and dimension.*　Freeman, San Francisco.

Minkowska, F. 1923 Recherches généalogiques et problèmes touchant aux caractères (en particulier à celui de l'epileptoidie). *Annales Medico-Psychologiques,* **81,** 149-167.

Minkowski, E. 1953　*La Schizophrénie.*　2e ed. Descree de Brouwer, Paris.（ミンコフスキー　E.　村上　仁（訳）1954　精神分裂病　みすず書房）

水上忠臣　1979　分裂病の状況因　飯田　真・風祭　元編　分裂病　有斐閣

森山公夫　1968　両極的見地による躁うつ病の人間学的類型学　精神神経学雑誌，**70,** 922-938.

Nannarello, J. J. 1953 Schizoid. *Journal of nervous and mental disease,* **118,** 237-246.

大原　貢・工藤　勉　1972　てんかん発作とヒステリー発作のKombinationについて　—その治療抵抗の問

題を中心に一．精神医学，**14,** 229-238.

Rabe, F. 1966. Hysterische Anfälle bei Epilepsie. *Nervenarzt,* **37,** 141-147.

Rabe, F. 1970 *Die Kombination Hysterischer und Epileptischer Anfälle.* Springer, Berlin.

Rohracher, H. 1956 *Kleine Charakterkunde.* Urban & Schwarzenberg, Wien-Innsbruck. (ローラッヘル H. 宮本忠雄（訳） 1966 性格学入門 みすず書房)

更井正和・籠本孝雄・松永秀典・谷口典男・亀田英明・東 司 1983 躁うつ病における病前性格の計量的研究 精神医学，**25,** 752-755.

下田光造 1941 躁うつ病の病前性格について 精神神経学雑誌，**45,** 101-103.

Skalweit, W. 1934 *Konstitution und Prozess, Schizophrenie.* Thieme, Leipzig.

Spaulding, W. D., & Cole, J. K. (eds.) 1983 *Theories of schizophrenia and psychosis.* (Nebraska Symposium on Motivation) University of Nebraska Press.

Tellenbach, H. 1961 *Melancholie.* Springer, Berlin.

Tellenbach, H. 1965 Epilepsie als Anfallsleiden und als Psychose. Über alternative Psychosen paranoider Pragung bei "forcierter Normalisierung" (Landolt) des Elektroenzephalogramms Epileptischer. *Nervenarzt,* **36,** 190-198.

若林明雄 1981 自己評定と他者評定からみたパーソナリティ認知次元について 日本心理学会第45回大会発表論文集，576.

若林明雄 1982a パーソナリティ認知次元の検討 (2) —パーソナリティ特性次元と3気質類型について— 日本心理学会第46回大会予稿集，419.

若林明雄 1982b "VERAC-性格検査" の標準化 日本教育心理学会第24回総会発表論文集，816-817.

若林明雄 1984 パーソナリティ類型論の理論的検討 —3気質類型・二重構造モデルについて— 日本教育心理学会第26回総会発表論文集，362-363.

若林明雄 1985 パーソナリティ類型論の理論的検討（Ⅱ）—3気質類型・複合構造モデルとパーソナリティのフラクタル性について— 日本教育心理学会第27回総会発表論文集，432-433.

若林明雄 1986a パーソナリティ類型論における分裂性気質型の検討 —分離性および自閉性について—．日本大学心理学研究，**7,** 1-12.

若林明雄 1986b VERAC-性格検査の標準化 —気質類型・性格特性統合理論にもとづく性格検査作成の試み—．応用心理学研究，**11,** 19-32.

若林明雄 1986c パーソナリティ類型論の理論的検討（Ⅲ）—3気質類型・複合構造モデルの検討について—．日本教育心理学会第28回総会発表論文集，324-325.

若林明雄 1986d 質問紙法検査にもとづくパーソナリティ類型の検討 心理学研究 **57,** 315-319.

若林明雄 1987 パーソナリティ類型論における循環性気質型の検討 —循環性気質にみられる同調性・執着性の構造的把握の試み—．心理学研究，**58,** 1-7.

若林明雄 1994 パーソナリティ研究における粘着性概念の検討 —粘着性における類てんかん性とヒステリー性の構造的理解— 心理臨床学研究 **11,** 296-312.

Weigel, R. H., & Newman, L. S. 1976 Increasing attitude-behavior correspondence by broadening the scope of the behavioral measure. *Journal of Personality and Social Psychology,* **33,** 793-802.

Wenzl, H. 1965 Zur biographischen Situation zu Beginn und im Verlauf epileptischer Erkrankungen. (Dissertation).

Witkin, H. A. et al. 1971 *A manual for the embedded figures tests.* Consulting Psychologist Press.

安永 浩 1977 分裂病の論理学的精神病理 —"ファントム空間" 論— 医学書院

安永 浩 1980 中心気質という概念について，木村敏編 てんかんの人間学．東京大学出版会.